

資料

シンポジウム「被害者分断の克服に向けて」

岡田	三谷	国宗	堅山	川本	鈴木
行雄	仁美	直子	勲	愛一郎	桂樹
				チッソ水俣病被害当事者	熊本大学法学部
				ハンセン病被害当事者	
				熊本県弁護士会弁護士	
				熊本大学法学部	
				熊本大学法学部	

岡田…二時になりました。それではただいまよりシンポジウムを開催したいと思います。それではまず、シンポジウム開会にあたり、熊本大学法学部長の鈴木桂樹さんからお話しいただきたいと思います。

鈴木…こんにちは。熊本大学大学院人文社会科学研究部長・法学部長の鈴木桂樹と申します。よろしく願います。ひとつと、ご挨拶をさせていただきます。

大学の組織や教育システムは年々変化して参りました。今日主催者として名前を揚げさせていただいている「大学院人文社

会科学研究部」も、三年前の二〇一七年に発足しました。それまでいろいろな組織に属していた教員を人文社会科学領域という大枠でもつてまとめた教員組織です。研究活動の活性化はもとより、機動的で柔軟な対応が可能になるとことで、学部教育あるいは大学院教育の充実を目指しています。

大学院教育でいいますと、去年(二〇一九年)改組を行い、「大学院社会文化科学教育部」という名称で新たなスタートを切っています。特に法学系として、それまでのいくつかの専攻やコースを再編、強化する形で「法政・紛争解決学専攻」を設けました。法学、政治学あるいは経済学そして紛争解決学、要は社会科学の幅広い知識を身につけ、現代社会がかかえる様々な課題に取り組む、そういう能力を持った人材を養成していきたいと考えています。学部との関係でいえば、法学部で学んだ学生さんたちの一歩進んだ学びの場あるいは研究の場として位置付けています。まだ名前が浸透しておりませんので、これを機会にまた少し理解を深めていただければと思います。

さて、学問あるいは研究は日々専門化し、進化をしています。それはそれで必然でもあり、あるいは必要でもあるのですけれども、それは他面において細分化が進んでいて、時として視野狭窄に陥っているのではないかとというご指摘あるいは危惧が聞こえてくる場合があります。重要なのはそういう専門進化した社会科学というものが元来の出発点であるマクロな意味での社会の視点で見たときにどれだけの力を発揮できているかだと思

います。

こうした認識の下で研究部(法学系)では、熊本が直面している社会問題の克服に向けた総合的な研究あるいは教育をテーマに掲げて取り組みを始めています。「被害者の分断」という視点を据えて水俣病やハンセン病の諸相を考える今日のシンポジウムはその第一歩となります。充実した議論が展開されることを期待しています。

最後になりましたけれども今日ご登壇いただくパネリストの方々に改めてお礼を申し上げて私のあいさつに代えたいと思います。どうぞよろしく願います。

岡田：ありがとうございます。それでは川本愛一郎さんにさっそくご登壇いただきたいと思います。

川本愛一郎さんのお話

水俣病多発地区に生まれ育った

ただいま紹介にあずかりました川本です。私は水俣生まれの水俣育ち、現在も水俣に住んでいます。六二歳になりました。一九五八(昭和三三)年三月生まれです。

ちょうど私と同じ年代の方に胎児性の水俣病の患者さんたちがたくさんいらっしゃいます。私の同級生にも兄弟姉妹に胎児性の患者さんがいます。私は水俣市の月浦というところに今も

住んでいます。私を通ったのは、袋小学校、袋中学校で二クラスの小さな学校でした。

六六名の同級生ですが、同級生の両親や兄弟姉妹、祖父母、親せきなど含めると、認定患者や医療手帳保持者、被害者手帳保持者など、ほぼ全員が、水俣病被害者といっていると思います。よくある質問で、学校で水俣病でのいじめとか無かったですかとか、差別が無かったですかとか聞かれるのですが、水俣病での差別やいじめはありませんでした。

なぜかという、みんな被害者、水俣病の患者家族だったのでお互い水俣病のことには触れない、配慮するというのがありました。逆に言うところ暮らしている住民全員が、水俣病被害者であるという、それくらいの多発地区で生まれ育ったといえます。

チッソ水俣病事件

今日は、スライドを使いながら話をさせていただきたいと思っています。まず私は水俣病という言葉を使わないようにしています。じゃあどういう言葉を使うかというと、水俣病事件、特に今まで水俣病事件という言葉を使っていたのですが、今日からはチッソというのを頭につけてチッソ水俣病事件というのをを使うように致します。これは、また後程、なぜそれをつけるのか、その言葉の経緯、その背景をしつかり皆さんと一緒に考えることができればいいかなと思っています。

例えば、私の父親は水俣病過激派患者と呼ばれました。そこで、私たちは、過激派患者家族と言われました。何が激しすぎているのだろう、むしろ当たり前じゃないかと私は思ったのですが、この言葉や色んなことを皆さんと一緒に考える契機になればと思います。

父川本輝夫と家族の闘い

このスライドの写真は父親です。六七歳で亡くなりました。父親の一生というのはほとんど水俣病と共にあったといっても過言ではないと思います。父は一九三一（昭和六）年生まれですが、翌年の一九三二（昭和七）年からチッソ水俣工場ではアセトアルデヒドの工程が始まり、有機水銀が流され始めました。父の六七年の生涯は、チッソ水俣病事件と向き合い、そして患者たちの救済に捧げた一生と思っています。

本日の講話は、まず一番目に父、川本輝夫と家族の闘い、そして二番目に父と私たちが経験した分断ということについてお話をしたいと思います。三番目に分断を克服する道とは何かというのを自分の経験、体験等々を通して皆さんと一緒に考えられたらと思います。四番目に父親の素顔についてお伝えしたいと思います。

水俣病発生の頃の我が家の暮らし…祖父の水俣病発病と死、父の発病、母の流産

まず父と家族の闘いです。これは若き日の父輝夫と母みやこです。一九五七（昭和三二）年に結婚をしています。父親が二五歳、母は二六歳で一年上の姉さん女房でした。本当に貧しい中で結婚し、生活をスタートしたんですけれども本当に仲のいい夫婦、両親でした。結婚したところか、父に手足の痺れ、疲れやすさなど水俣病の症状が始めています。定職もなく非常に貧しい生活の中での新婚生活スタートでした。

右の写真は、ちょうど結婚一年後の一九五八（昭和三三）年撮影で、生後三〜四か月の私を抱く母親の姿です。この撮影地というのは水俣湾です。月浦の海岸ですが、この海岸のすぐ上にある家の五歳と三歳の子どもさんたちが一九五六（昭和三一）年に水俣病と公式に見えられました。その家のすぐ下の海岸で撮った写真です。この写真をよく見てもうらえると、私の頭の後ろぐらい、母親の方の後ろぐらいに近所のおばちゃんを書いてあります。

私の家は旧国道三号線の出月の交差点にあります。近所の方が海に行くときの通り道になっています。潮が大きく引く時期には、私の家に「川本さん貝を拾い行こう」と声をかけて皆さん行っていました。みんな連れだつて海岸に出て貝などを拾っていました。そこに残念ながらチツソ水俣工場から有機水銀を含んだ重金属の廃液が流されて水俣病が発生したという本当に

悲しい歴史があります。

次の写真は実際に私が去年か一昨年ぐらいですれども水俣の資料館のちょうど後ろに海岸があるのですが、私の妻と一時間ぐらいで獲った魚介類です。これだけで約六種類ぐらいの貝とか、カメノテとかです。私が小さい頃は普通にこういう魚介類が獲れて、漁師でなくても普通に海の幸、自然の恵みをいただいていたという生活でした。

私の祖父は水俣湾で一本釣りの漁師をしていました。祖父の血を引いた私も魚釣りが好きで、小さな船を買って休みの日など水俣湾の沖で魚釣りをしています。この写真は私が実際に釣った魚ですが、ガラカブ（カサゴ）とかキス、そして根魚です。ただし、最盛期の魚種が豊富だったところに比べると釣れる魚はやはりまだ少なく、漁獲量も減っているというのが現実です。今は水俣湾等の高濃度有機水銀を含むヘドロの浚渫と埋め立て工事（ヘドロの封じ込め）も終了して、安全宣言も出されて、魚介類は安全だという安全宣言が出ております。

この左側の写真は、私が小学校一年に入ったときの入学式の記念写真です。父と母そして四歳下の妹です。父親の足元を見ると、下駄をはいています。なぜ下駄をはいているのかというと、手足の痺れが強くて特に靴とかスリッパとか鼻緒がないものをはいているとすっぽ抜けるということで、よく下駄とか草履とか長靴をはいていました。そうした父親をよく覚えております。この私の入学式のときの写真も下駄です。そんな写真の

一つです。

私と妹の間に前後にあと二人子どもがいたのですが、母は流産という形で子どもを亡くしております。流産に関しても住民健診とかそういう調査がなされてないので、何人の子どもたちが水俣病の影響で汚染された環境、つまり水俣病によって亡くなったといったのかわからないです。データがないだけです。本当に残念ですけども不知火海沿岸で数万人から、もしかしたら十数万人の子どもたちが亡くなっていったのかもしれない。データがない、調べてない、そういうことも非常に残念です。水俣病の教訓といえる、失敗の歴史、失敗の教訓だと思っております。

右の写真は祖父と私の写真ですけれども、ちょうど私が二歳のころ、祖父は私のお守りをしながら水俣湾で一本釣りの船で水俣湾に出て魚を釣ってきていました。その魚を家族と一緒に食べていました。この写真の後ろは私の家です。国道三号線もこの時はまだ舗装されていなくて、雨が降るとひどい水たまりで、板塀への泥はねがすごくて、晴れた日には土煙がもうもうと上がっていました。産婆さんが来て、その家で私は生まれました。

非常に貧しい暮らしでしたが、祖父が釣ってくる魚、そして父と母の日雇いで細々とした生活でしたが幸せな時間だったと思います。

ちょうど妹が生まれた一九六二（昭和三七）年頃から祖父は

水俣病の症状が悪化していきます。そして三年ほど寝込んで、最終的には痙攣発作など水俣病劇症型の苦しみの中で、亡くなりました。

水俣病の症状で亡くなりましたが祖父は水俣病患者としては未認定です。家で祖父が寝込んでいた姿をよく覚えております。痺れが強いということで足首に輪ゴムを巻いて、輪ゴムを巻くと血行は悪くなりますが痺れは収まるということで、祖父の足首が紫色に変色していたのを今でもはっきり覚えております。このスライドにある我が家は非常に建付けが悪くて、台風が来た時には屋根が飛んで目が覚めると屋根がなかったということがありました。民生委員が祖父が寝込んだ時に来てくれましたが、私の父親が応対し、ちょうど梁が三〇センチほどずれているのを見て父親が「ほら見てんな。こげん家に住んどつてな。じいちゃんがかわいそうで」という話をしていると、民生委員さんが腰を抜かして慌てて家を出たという、それぐらい貧しい家でした。水俣病の症状で本当に苦しんで亡くなった祖父を父は看取り、それから父親の水俣病の活動が始まりました。

熱意とは、ことある毎に意志を表明することに他ならない…水俣病潜在患者発掘活動開始

「熱意とはことあるごとに意思を表明することに他ならない」。これは父親が亡くなるときに残した言葉ですが、本当にこの言葉に象徴されるような父の行動がそれから始まります。

水俣病で亡くなったことを祖父の主治医に確めに行くと、「何を今ごろ言っているのか。水俣病はもう終わっている。そんなに君は金が欲しいのか」とそんな理不尽なことを言われ、父親は本当に情けない思いをしながらそれでも他にたくさん苦しんでいる人がいるのではないかと水俣病の多発地区を回り始めました。ちょうど私が小学校六年生頃から中学校一年生頃にかけての時期です。本日に毎日毎晩でした。そのころ父親は准看護師として近くの精神病院に勤めていて夜勤などもありましたが、休日とか日勤の仕事が終わった後、夕方五時半ごろに帰ってくるとご飯に味噌汁をかけて急いでかきこんで、本日に毎日毎晩出かけていきます。どこに行っているのか知らなかったのですが、後で話を聞くと、水俣市内の水俣病多発地区であったり遠くは芦北の女島というところや、隣の鹿児島県の出水市、阿久根市など自転車でも二〜三時間かかるようなところに本日に毎日毎晩出かけて行つて話を聞いてきたそうです。行つた先では「何しに来たのか」と警戒されたり、「水俣病の話聞かせてくれ」と言つても「家には水俣病はおらん。家から水俣病を出すわけにはいかん。就職とか子どもたちの結婚のときに嫌がらせや差別があるし、金の亡者だといわれるのは嫌だ」と本日に泣き寝入りをしながらか申請をしない人もたくさんいたと聞いております。

実際にそうやって家を訪問すると、多くの家庭でご主人や奥さん、祖父母が水俣病で寝込んでいて、その傍らではまだ幼い

胎児性水俣病と思しき子どもさんが寝たきりで動けずにいる。

そういう事実を父親は目の当たりにして、このようなひどい被害状況があるのだというのを実感したそうです。そのころのエピソードですが、毎日毎晩出ていく父親がたまたま夕方にいたものから、私は「父ちゃん、今日は行かんでよかったですか？」と聞いた記憶があります。父がどこに何の目的で出かけていくのか私は知りませんでした。何かにとりつかれたように出ていく父親の姿を今でもはっきり覚えております。そうやって多発地区を回りながらたくさんの人と話をしようやく一部の方ですけれども父親と一緒に認定申請に行く人が出てきて、何回も棄却をされたのですが、そのたびに行政不服審査という手法で何回も申請や申立をしてようやく認定をされました。

父の水俣病認定と自主交渉

ただし、父親たちは新認定患者ということで差別をされました。旧認定患者と新認定患者という言葉がそのころありました。私はこの「旧認定患者」「新認定患者」という言葉も、分断の一つと思います。その使った言葉がだんだん定着していく。それが言つてみれば、父親たちを追いつめていくことになったと思います。そしてチッソ工場に補償の交渉を申し込むのですが、けんもほろろに追い返されて、とうとうやむなく父親たちは水俣のチッソ工場前とチッソ東京本社前に座り込むことになりました。

した。

この向かって左側の写真は、水俣チッソ工場の正門前にテントを張って座り込んだ父親たちです。右側の写真は、同じく父親たちが東京のチッソ本社の前の路上で座り込んだときのテントです。父が、チッソとの自主交渉のために上京するときに自宅玄関で見送りましたが、父は「ちょっと東京に行ってくつで一週間くらいで帰る」と言っていてきました。

チッソは父たちの交渉に誠実に応じることなく、父たちは、やむなくチッソ本社内に座り込みました。訴訟派の患者さんたちに対して、チッソと直接対峙して補償を要求する父たちは、自主交渉派と呼ばれました。

私が中学二年の時に、父親たちの自主交渉の闘いが始まったのですが、一年九か月の長きにわたりました。父親が自主交渉の闘いを終えて帰ったとき、私は高校一年生になっていました。妹は小学校五年生の時に自主交渉が始まり、父親が家に帰ってきたときは、中学一年生になっていました。父親は、自主交渉を始めてチッソが交渉を拒否し、座り込みが長引くにつれて、勤めていた精神科病院の准看護師の仕事を辞めざるを得ませんでした。

父たち自主交渉派への誹謗中傷と激しい闘い…患者とチッソ水俣工場労働者の分断

当時、水俣はチッソ城下町と言われていたので父親たちへの

誹謗中傷というのは本当に激しいものでありました。ビラ合戦と言って、チッソを擁護する側の人、その中には行政とか市や市議会の人たちも入っていたのですが、そういう人たちがビラを撒いて父親たちを誹謗中傷するというのが私の目の前で繰り返されていて、本当に悲しかったことを覚えています。この写真は、チッソ東京本社で、父たちの交渉をはねつけるために動員されたチッソ社員に、しがみついている父親です。チッソは、父たちの自主交渉対策にチッソ水俣工場からも、社員を動員していました。

チッソ東京本社で、チッソ水俣工場のチッソ社員と水俣病患者が対峙する構造は、同じ水俣に住んでいる者同士が激しく対立させられる「分断工作」と言っても過言ではありません。父たちが、チッソの本社との交渉に行くと、社員たちが出てきてバリケードを張って追いつ返す。その中で父親は何回もけがをしています。

父たちとユージン・スミス氏らが暴行を受け負傷

一九七二（昭和四七）年一月七日には、千葉県にあるチッソ五井工場の労働組合に、父たちとカメラマンのユージン・スミス氏らが、支援と理解を求めて面談に行くこと約二〇〇人の工場社員に集団で暴行を受けました。父もユージンも負傷し、父は右足指骨折、ユージンは左目失明、口腔裂傷、ユージンの妻アイリーン、他の同行報道記者も負傷しました。ユージンは、第

二次世界大戦中に沖縄で取材中に日本軍の砲撃で負傷した傷がこの暴行で悪化し、六年後に死亡しました。

ユージンの生涯を、監督レヒタス氏、ジョニー・デップ氏主演で映画化した「MINAMITA」が今年二月に完成しました。映画の中で父を真田広之氏が演じています。封切は未定です。

自主交渉を遮る鉄格子

父たちは、チッソの本社の路上に張ったテントから朝一〇時と午後三時にはチッソ本社のある四階に行つて、交渉を申し込むのですが追いつ返されるといふ繰り返しでした。

右側の写真は同じくチッソの本社での交渉時の写真なのですが、なんと鉄格子ができてしまいました。父親たちが話を聞いてくると行くと面倒くさいものですから鉄格子で追いつ返したのです。ある時、父は鉄格子が開いているのを見つけ、入ろうとしてチッソ社員に阻まれ五時間も鉄格子に挟まれ負傷したこともありました。

これも交渉の時の写真ですが、左側の写真はチッソの島田社長に父親が自分の小指をカミソリで切りながら血を流して、その血で「誠意ある回答を示せ」と書いている写真です。

右側も本当に長時間にわたる、やっと相對して話すという場面ができたときの交渉の中の写真です。父親は「人は幸せになるために生まれてきた」が口癖でした。

この交渉を記録した、石牟礼道子さんの著書の中に、父が島

田社長に「社長、人の幸せは何だと思いますか？」と問いかける場面があります。

父たちを励ますために家族で上京

この写真は座り込みをしている父を励ますために家族で上京したときのもので、私が中学校二年生、妹が小学校五年生です。初めて東京に夜行列車で行ったのですが、妹は着ていく服がなかったものですから母親が夜なべをして毛糸のコートを作ってくれました。

私は、周りは本当に敵だらけだと思っていましたが、上京してたくさんの方が支えてくれるのを見て本当に嬉しかったです。母親が私たちに「父ちゃんは偉か。人のために闘っている」と言っていました。私と妹も父親を信じて父親へ激励の手紙を書いたりしました。

夜中の嫌がらせ電話や葉書

このころのエピソードなのですが、父親たちの交渉のニュースがNHKとかで流されると、きまってその夜自宅の電話が鳴ります。夜中二時ころですけれどもリンリンと鳴るのです。黒電話が夜中に鳴ると本当に怖かったですね。今でも忘れませんけれど、その電話はだいたい嫌がらせ電話です。母親が出ましたけれど、出ると切れる。また鳴り出すというのが一時間ぐらい続くのです。私も時折電話に出ることがありました。夜中

寝ていられないのです。受話器を取ると大体切れるのですが、ときには本当に汚い言葉で「バカ」とか「くそ、死ね」といわれます。本当に悔しかったし悲しかったのを覚えています。本当に誹謗中傷というのは強かったのです。葉書も届くのです、嫌がらせ葉書。その葉書というのは住所がないのです。「熊本県川本輝夫」で届きます。住所がないのによく届くなと思ひながら裏を見ると、同じような汚い言葉の誹謗中傷でした。本当に、「バカ、死ね」の世界です。そういうものが届きました。本当に悔しかったです。

父の四回逮捕と二回の家宅搜索、放火未遂

また、父親は四回逮捕されています。家宅搜索は二回受けました。父は、四回逮捕されましたが、全て無罪で釈放されています。ある朝まだ夜明け前ですが、家の周りが騒がしいので母が外を見てみると警官が十数名家の周りを取り囲んでいました。

母が何事かと尋ねると「お宅のご主人を逮捕しに来た」と言っただけです。母は、「子どもたちの前では逮捕してくれるな。子どもたちが学校に行つてからにしてくれ」と頼みました。私たちが登校してから父は連行されました。本当にこれも辛い経験でした。

また、朝起きると玄関の前に消火器が置いてあったりしました。火をつけるぞという脅しでした。怖かったです。実際に火

事寸前ということもありました。父親は東京に座り込んでいて、水俣の家は祖父が亡くなっておりましたので母親と私と妹で住んでおりましたが、昼間母親は水俣市内の病院で看護助手をしておりまして私は中学校、妹は小学校でした。

昼間は誰もいせんので、田舎でしたから昼間玄関の鍵をかけていなかったのです。昼間誰もいない私の家に誰かが忍び込んで、タイマーで沸かす風呂だったのですが、そのタイマーを目いっぱい回して、悪戯の可能性もありますが、妹が小学校から帰った時には本当に沸騰をして風呂の湯は残りわずか。家中に沸騰した水蒸気が充満していて障子や襖がべろ剥けていました。家じゅう水浸し、風呂は火事寸前で妹は泣きながら母に「帰ってきて」と電話し、母親があわてて帰ってきて事なきを得たということがありました。

私は中学校で野球部でしたのでちよつと帰りが遅かったのですが、帰ってきたらそういう状況ということがありました。なぜここまでされるのか？腹立たしいとともに悔しかったです。

母は、私たち兄妹に懐中電灯を持たせて寝かせた

そういう嫌がらせや直接的な攻撃が頻繁にあったので、夜はさすがに鍵をかけて寝ていました。私と妹は二段ベッドで寝ていて、母親は私たちに懐中電灯を持たせていました。こういうことかという、夜中に暴漢が入ってきたときにその懐中電灯を持って裏口から隣の家へ逃げ込むということでした。それぐ

らい緊張した状況でしたが、母親はずっと、「父ちゃんは偉か。人のために闘っている」ということを言ってくれたので、父親の闘いを家族で支えることができました。

お陰様で、私と妹も、今では皆さんの前で自分たちの経験を話せるようになりました。敵も多かったのですが、全力で正義の真理を掲げて闘うと全国のたくさんの方が支えてくれるということを知りました。この場を借りて感謝を申し上げたいと思います。本当に支援をしていただいた方には支えられました。

父と私…環境庁座り込み

父たちの自主交渉という闘いは、チッソとの補償協定書がまとまって一応の決着をみたのですが、その後は国の責任や未認定患者の問題などで国を相手に闘ったり、熊本県庁の前に座り込んだりしました。これは環境庁に座り込んだ時の写真なのですが、当時の環境庁長官は石原慎太郎氏でした。私もまたまこの時期東京にいて、学生でしたので、父親の交渉や座り込みの抗議を支援の側、患者家族でしたがほぼ支援者の一人として扱われて、カンパ活動であったり、いろいろな交渉の場面に一緒に出掛けて行って患者さんたちや父親たちのサポートをしました。

一九七八（昭和五三）年二月二五日に環境庁に座り込んで、三月一九日に強制排除されました。このときも父親と一緒に強制排除されたのですが、父親たちの闘い方は裸一貫といえます。

か、本当にあるのは真実を追求するという姿勢のみです。たくさんの方に支えられて闘った父親の姿を目の当たりにしました。闘うという姿とか姿勢を学んだ気がします。

私が考える分断①…祖父の未認定の理由（医学的分断）

私たちが経験した分断というものをみなさんと一緒に考えたいと思います。まず分断の一つ目として、祖父は水俣病の劇症型で亡くなったのですが、苦しみながら亡くなっていききましたけれども、未認定です。その未認定の理由というのを皆さんと一緒に考えたいと思います。祖父は、以前も痺れなどありましたが顕著に症状が悪化し寝込むようになったのが一九六一（昭和三六）年一〇月です。水俣市立病院に入院し、感覚障害、運動障害、企図振戦、難聴、構音障害などが認められました。視野狭窄は調べていないだけです。

今でも祖父の主治医の診断書のコピーで残っており、私も見ましたが、ほぼ水俣病の症状がそろっています。しかし、祖父は未認定です。未認定の理由というのは水俣病の発症期間から外れている、ただそれだけです。症状としてはあるのですが、期間から外れているということで未認定です。水俣病に関する当時の医学においては、一九五三（昭和二八）年に始まり一九六〇（昭和三五）年に終息したというのが通説でした。しかし一九三二（昭和七）年から一九六八（昭和四三）年まで有機水銀を含んだ排水は、ずっと流されておりますので通説に

は何の根拠もありません。考えられるのは、一九六〇（昭和三五）年終息説の背景として、一九五九（昭和三四）年の一二月二四日に、チッソはサイクレーターという単なる浄化槽ないし沈殿槽を作って完工をしたことです。その写真なのですが、来賓の熊本県知事の前で当時のチッソの社長吉岡喜一氏は、サイクレーターの処理水を飲んでみせるというパフォーマンスをしています。

ただし飲んだ処理水というのは後にその時の担当の社員の方の証言で明らかになっているのですが、水道水とすり替えていたそうです。この中で吉岡社長は「蛇足ではございますが一般の化学工場にはない本設備のごとき高級大規模な浄化槽の装置は本工場が最初でございます」と意気揚々と宣言しています。こういうサイクレーターが完成して水俣病発生はなくなったというのが背景にあり、水俣病は一九六〇（昭和三五）年に終息したという学説が広まっています。

私は、水俣病が一時終息させられたもう一つの背景としては一九六四（昭和三九）年の東京オリンピックもあるのではないかと思います。当時は、池田内閣で経済復興が前面に押し出されてオリンピックに一気になだれ込んでいくというときに水俣病とか問題があると非常にまずい、不都合なものですから、そういうのをまずは終息させるということで起こっていったと考えています。

私が考える分断②…家宅搜索場面をマスコミに報道させる（世論操作的分断）

二つ目の分断ですが、父親は先ほど申しました通り四回逮捕されて家宅搜索は二回受けております。家宅搜索の場面は、当時、NHK等のニュースで流されていました。川本容疑者宅家宅搜索というところで実際その場面を見ていると捜査員が妹の勉強機の教科書とかノートを払いのけているシーンが出るのです。また、熊本日日新聞の報道写真集にも「川本容疑者宅家宅搜索」の写真相載されています。

当時はそういう風潮だったのかもしれませんが、配慮なしに家宅搜索の場面を流していました。意図的な部分もあったのではと思います。国とか大企業に歯向かうとこういうことになるんだよという見せしめということもあったのだと思います。

私が考える分断③…東京と水俣での漁民騒動への行政対応の違い（行政的分断）

三つ目の分断は、二つの漁民騒動での対応の違いです。東京で起こった漁民騒動と不知火海水俣で起こった漁民騒動です。一九五八（昭和二三）年に東京湾江戸川沖で起こった漁民騒動と一九五九（昭和三四）年に不知火海水俣で起こった漁民騒動ですが、東京で起こった漁民騒動では国と東京都は、行政指導を発揮しています。当時の国会で水質二法という二つの法律まで作って東京での漁民騒動は終息しました。解決しております。

しかし、翌年の不知火海での漁民騒動は放置されました。このとき、不知火海周辺の漁協加盟の約二千人ないし四千人とも言われている漁民たちがチッソの工場に押しかけて操業停止を求めました。このとき祖父もこのデモに参加しております。その時にとられた対応ですが、警官隊を導入して双方にたくさんの方が人が出ました。そして五三人が逮捕されるということが起こりました。国も熊本県も行政指導をせず、そのまま放置しました。

五三人の逮捕された漁民たちの中には、その後、生活苦と犯罪者になってしまったことから三人の漁師さんたちが首を吊って死んでしまうという悲しい出来事も起こりました。

東京と水俣で同じようなことが起こったのになぜこんなに違うのか、本当に私は腹立たしいし、憤りを感じます。不知火海での漁民騒動は、国と熊本県に見捨てられました。私は、水俣という地域はこの時、見捨てられたと思っています。父親は「失(う)して水俣病」という言葉を使っていました。「見捨てられた水俣病」という意味です。本当に見捨てられたのだと思います。

私が考える分断④…チッソの患者への差別的分断

四つ目の分断として見舞金契約を考えてみます。一九五九(昭和三四)年一月二三日、不知火海漁民騒動の直後になります。が、この同じ年一月七日にチッソ付属病院の細川一先生の猫

実験において、猫四〇〇号が発病しています。猫四〇〇号というのは、チッソの工場廃液を毎朝二〇グラムずつ餌にかけて猫が水俣病を発症するかどうかの実験に使われた猫です。実験ネコに通し番号をつけて四〇〇番目の猫ということで猫四〇〇号と呼ばれています。猫四〇〇号の水俣病発症は、細川院長からチッソ社長まで報告されました。

年も押し迫って患者さんたちは年を越すお金もない、食べるものもないという切羽詰まった状況で提示されたのが見舞金契約です。「おたくらも困っているだろうから見舞金を差し上げる。困っている人を人道上見捨てるわけにはいかない」という文言です。本来であれば補償金のはずですが見舞金ということで、死者には三〇万円と葬祭料二万円、生存の患者には、成年者に年金一〇万円、未成年者に三万円。この未成年者というのは小児水俣病とか胎児性の水俣病患者さんを表します。その子どもたちが成年に達したときは五万円。本来であれば成年者には一〇万円と提示しているのに、胎児性とか小児水俣病の患者さんには半分の五万円しか出さないと、値切っています。

私はこれを見て、「なぜ？」と思ったのですが、ある方に聞いたら、これは差別であって、本来ならば、自分たちが加害者として傷つけた子どもたちなのに、その子どもたちに対して大人になっても半分の五万円しか払わない。その理由としては、面と向かって「あなたは歩けますか、寝たきりじゃないですか、手足動きますか」と。

そんな理不尽なことを言っているのです。労働力としか見ていない。本当に腹立たしい内容です。そして、その契約の第五条の条項は、今後、原因が工場排水と判明しても追加補償しないと明記しています。

先ほど言いましたように、見舞金契約時と同じ年の一〇月七日の猫実験で自分のところの廃液が原因だと分かっているのです。分かった上で、患者さんたちが契約の内容なんて理解できないだろうと高を括り、こういう文言を入れ込んで、患者さんたちの弱みに付け込みハンコをつかざるを得ない状況に追い込んでいます。本当に腹立たしい内容です。ただし、これは後の水俣病裁判で公序良俗に反するという事で破棄されております。

私が考える分断⑤…水俣病改名運動の変遷

五つ目の分断として、水俣病の改名運動を考えてみます。一九五八（昭和三三）年、私が生まれた年に、水俣市議会で水俣市議の松本雄三という方が、この方は水俣市の漁協の理事もされていたそうですが、「魚関係をやっている所以他県に魚を出荷したときにトラツクの名前を隠されたりする。改名をお願いしたい」という質疑を水俣市議会であげております。これは、背景として当時の水俣市の漁協はチツソと闘う側にいた漁協ですので、どちらかというとチツソと対峙する側の発言と私は思っています。

次の年の一九五九（昭和三四）年一〇月には熊本日日新聞で「合理性を欠いた病名。水俣病にのせて」という記事が載っております。これは非常に冷静な記事だと私は考えています。

一九七二（昭和四七）年二月二十七日ですが、当時の環境庁長官大石武一氏が水俣を視察しました。その時には水俣を明るくする市民連絡協議会という団体が、「水俣病という名前を変えてください」というプラカードを立てております。これは、私はどちらかというとチツソ擁護と考えています。国は、この頃は水俣病に対して非常に冷淡で、募引きを図ろうとしている時期でしたので、この改名運動について懐疑的ですし、もっと調べなければならぬと思っています。最近の二〇一九（平成三一）年三月には、写真のように水俣市のチツソ水俣工場の国道三号線沿いに看板が設置されました。メチル水銀中毒症で病名改正を求める水俣市民の会によるもので、私も実際に看板を見ましたが、これはどちらかというと中立というよりも、水俣病は負のイメージや暗いという文脈にあり、その風評被害を表現していると思います。

この看板はバージョンアップしまして、最近新しい看板となっております。「水俣病は差別用語だ」という看板が設置されました。今回は、写真を撮ってこなかったのですが、差別用語だということで、これも一つ皆さんと考えていきたいことです。実は水俣病という病名が定着するまで、最初は「水俣奇病」と呼ばれていました。熊本大学医学部も水俣奇病医学研究

班という形で奇病という言葉を使っていたが、その後の変化を調べると、水俣病という言葉が使われたのは一九五七（昭和三二）年の六月二四日に熊本大学の研究班の中で武内忠雄先生による「奇病というのはあまりにも非医学的である。一応地名で呼んでみるのはいかが」という提案があったそうです。例えば、満州で不明疾患が出たときに勝山地区だったので勝山病と名付けた経緯があるということで、一時的な仮の名前を付けてはどうかということが話され提案があったそうです。

ただし中毒因子が確認されるまでは「水俣病（仮称）」としたいと、その後、原因が明らかになればその原因に応じた名称にすべきであるということを発言されております。しかし、水俣病がこのまま定着していきます。その理由としては一九七九（昭和五四）年に刊行された青林舎の『水俣病』では、その本の中で上記の武内忠雄先生が「その後も水俣病が使われ続けているのは公的な確認が遅くなったことがあります。国が確認したのは一九六八（昭和四三）年です。また、本症は単純な有機水銀中毒ではなく、食中毒という汚染された魚介類を摂取してそのうえで発症した特殊な発生メカニズムをもつということ。また公害という特殊な背景があるということ、水俣病というのが使われたのではないか」と言っております。

私もだいたいそのような背景だったのだろーと思います。私としては水俣病に関しては、名前はこのままでいいのではないかと思っています。なぜかというとなるメチル水銀中毒では

ないということ、そして複合汚染といって他の重金属も一緒に流されてその重金属も魚介類が体内に取り込み、それを人間が食べるというメカニズムです。そこでは生物濃縮ということが起こっている、単なる「メチル水銀中毒症」では、「水俣病」の全体像を表現できないと思います。

私が考える分断⑥…制度的分断

同じ家族なのに「水俣病認定患者」「水俣病未認定患者」「水俣病医療手帳保持者」「水俣病被害者手帳保持者」と呼ばれること

六つ目の分断ですが、これは私が経験したことです。水俣病特措法で使われている文言ですが、特措法というのは二〇一〇（平成二二）年四月一六日に当時の鳩山内閣で閣議決定しています。第二の政治決着と呼ばれていますが、「水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法」ということで、背景としては国の基準では水俣病と認定されない被害者らを対象とした国による新たな救済策とされています。

つまり国の基準としては水俣病と認定されない、しかし被害者であるというそういう矛盾したものを救済する法律だということ、この法律に基いて二〇一〇（平成二二）年五月一日から二〇一二（平成二四）年七月三十一日までの期間で、約六万八千人が申請しています。私はその中の一人です。約四万二千人が該当し一時金二二〇万円や年金の受給や医療費等

の控除を受けています。

私は二〇一二（平成二四）年五月に申請しました。七月には締め切りだと言われ、私は駆け込みで申請したのですが、一度棄却されました。そのあと再申請をしようと思ったら、なんと棄却の葉書に「再検討のお願いをされる方は」と書いてあるのです。再申請ではないのです。

つまり「申請」というのは主体が被害者側にあるのですが、「再検討のお願い」となると、その再検討は、申請を受けた県がするのです。私は納得できませんでしたが、再検討をお願いしました。二回目の再検討のお願い時には、私は、初めて、水俣病をたくさん診てこられた良心的な医師に、専門的に診てもらいました。愕然としました。自分に感覚障害があるということを知りました。本当に四肢末端に行くほど痛覚や触覚は落ちてますし、軽度ですが視野狭窄や運動失調もありました。自分では、わからなかったことです。

この身体ですっと生きてきていますので、何とか折り合いをつけながら生きています。魚釣りに行っても針も結べますし餌もつれます。けれども、実際に自分の中の感覚障害を証明してもらったときは愕然としました。

水俣病患者の家族であること、そして祖父が水俣市の漁協に所属して漁師をしていたことの証明書を添付するなど、再検討のお願い手続はハードルが高くなります。家族に認定患者がいること、漁業をしていた証明書など、私は二つともクリアしま

したので、認定されまして、私は「水俣病被害者手帳」というものを保持しております。

私の妹と母親は一九九五（平成七）年の最初の政治解決の時に申請をして、該当しましたので、「水俣病医療手帳保持者」と呼ばれています。私は特措法で申請しましたので「水俣病被害者手帳保持者」と呼ばれています。同じ家族の中で祖父は「水俣病未認定患者」、父親は「水俣病認定患者」、母と妹は「水俣病医療手帳保持者」、私は「水俣病被害者手帳保持者」と呼ばれています。これも分断の一つではないかと思っています。

分断を克服するために…五つの提案

時間ありませんので、分断の克服に向けてのまとめに入ります。まず、被害者の当事者として勇気を出す、つまり声を上げることです。水俣病事件で色んな政策などが積み重なってきていますが、ほとんどすべて被害者側から声を上げてできたものです。被害者の声を後追いつる形で政策が決定されていくという経緯があります。当事者として被害者の勇気も必要ですし、加害者としても認める勇気が必要だと思います。分断を克服するためには勇気を出す、声を上げる必要性があります。黙りこんでしまつと残念ながら、今の世の中ではなかったことにされてしまいます。やはり勇気をもって声を上げることが大事だと思います。

二番目に事実を知ることが大変重要だと思っています。勇気

を振り絞って被害を訴えたとき、利害関係から誹謗中傷、隠蔽、改ざん、裏切り、欺瞞、怠慢というものが付きまとう可能性があります。それらを退けるための強さを身につけるためには、事実を知ることが非常に大切なことだと思います。闘ってきた父親の姿を見てそう思います。

三番目に現場に学ぶということが非常に大切だと思います。本場の救済策や解決方法は、現場に身をおいて当事者と誠実に話し合う中にしかないと思います。

四番目に支援の方の情けと力です。本当に私たちは救われました。

五番目は真実を伝える。これはあらゆる伝手を使う必要がありますと思います。ここに父が使っていた『小六法』があります。その中に請願法という法律が掲載されています。この請願法に基づいて内閣に請願することができます。つまり天皇への直訴状になります。内閣に請願していいとなっていますので、父親はそれを使って平成天皇に請願書を出そうとしました。しかし、これは色んな理由があつて実現しませんでした。ところが、父親が亡くなった後に秋篠宮殿下が水俣に來られたり、平成天皇・皇后陛下も海の日に水俣で魚を放流するというイベントで來られました。父の願いが結果としてかない、父も喜んでいると思います。

父とユージン・スミスさんとの交流

ユージン・スミスさんについては、前にも触れましたが、この写真は、映画の監督のレヴィタスさん、女性の方はユージン・スミスさんの奥さん、アイリーンさんです。背の高い方はジョニー・デップさんの代理人の方です。私の家に來られて映画を撮る前に話を聞いていきました。

映画の主人公であるユージン・スミスさんは私の家のすぐ近くに一軒家を借りて三年間アイリーンさんと住まれて、水俣病患者さんや家族の写真を撮られていました。私の家から五〇メートルほどの近所に住まれましたので、ユージン・スミスさんが散歩されていたのを今でも覚えています。

覚えてたの英語で、私は中学生でしたが、「グッドモーニング」と言うところ「グッドモーニング」と答えてくれたり、すごくかっこいい方でした。父親たちが千葉県市原市のチツソ五井工場に支援を求めて行ったときにユージン・スミスさん夫妻も一緒に來られて支援の要請に行きましたが、逆にチツソの五井工場で社員たち二〇〇人ぐらいが父親やユージン・スミスさんたちを取り囲んで暴行を加えました。ユージン・スミスさんは太平洋戦争の沖繩戦の時に日本軍の砲弾で砲撃を受けてから体の中に砲弾が残っていて後遺症に苦しんでいました。この五井工場での暴行事件でそれが悪化して左目を失明したりして、とうとう六年後に亡くなりました。しかし、チツソの五井工場暴行事件で暴行した社員たちは何の咎めも受けていません。

父親は四回も逮捕されて家宅搜索も受けて起訴も経験しています。父親は最終的には、公訴棄却ということで、事実上、無罪を勝ち取っていますが、一方的に被害者ばかりが訴追されて逮捕、裁判をされて、加害者側は一切訴追されない。そういう理不尽なことが水俣病事件では起こりました。

父の素顔

父親が亡くなった後に、自宅に父の活動を伝える資料庫を作りました。父親は子どもが好きでしたので、私の娘は父親にとつて孫娘ですが、私の娘が小学校三年生のときに父親は亡くなりましたのでじいちゃんの思い出ということで絵を描いてくれました。父親は午後七時になると必ずNHKのニュースを見るところのが習慣でした。

悪いことをすると押し入れに突っ込みます。私の娘も悪いことをすると押し入れに突っ込まれていました。私も子どものころに押し入れに突っ込まれたことがあります。怖いですが、悪いことをすると、しっかりと怒る父親でした。

晩酌が好きで、焼酎を飲みながら孫に囲まれテレビのニュースを見るのが父親の楽しみでした。孫たちと刺身の取り合いをしてけんかしながら、家族団らんの幸せな時間を過ごせたと思っています。酒を飲んで、孫娘を膝に抱えながら爆睡していました。

テレビのチャンネルを変えると、ふっと起きて「見とったが

や」と言うので「見とつかい」とみんなで笑うのですが、そういう家庭で、晩年は好々爺といえますか、本当に幸せな時間を過ごすことができました。

こんな感じで父親の素顔は、どこにでもある普通の人でしたが、水俣病と一生をかけて闘い、未認定の患者さんたちや胎児性の患者さんたちたくさんの方を救済しました。

本日このような場を設けていただき、岡田先生はじめ皆さんに感謝申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

堅山勲さんのお話

堅山…新型コロナウイルスが猛威を振るっております。そういう規制等がある中で、異例な形でのシンポジウムということでございます。この新型コロナウイルスに感染し、お亡くなりになりました方に対して、心よりお悔やみを申し上げますものがございます。また、今もお病床において闘病中の方もたくさんおいでであるとお聞きをいたしております。一日も早いご快復をとお願いを申し上げます。また、コロナ問題に関する発言の機会があるとするれば、その時に発言をさせていただければと思っております。

さて、自己紹介をしなくちゃなんのかわかりません。実は、私は、「らい予防法」違憲国賠訴訟全国原告団協議会の事務局長でございます。と申し上げますよりも、ここ熊本の地で

一九九八年に「らい予防法」違憲国賠訴訟を立ち上げまして、その時の事務局長、そして勝訴判決を勝ち取り、その後、控訴断念のために上京いたしました。それから毎月のように、約一九年間でしょいか、東京と鹿児島を行ったり来たりしている、ということでございます。距離にいたしますと、なんだかここからお月様に二往復以上したんじゃないだろうか、ということをお聞かせください、まあ、そのような立場の者でございます。

先ほど水俣病のこととお話をいただきました。私の生まれが鹿児島県大口市であります。実は、先般阿久根に行つてまいりました。なんで行つたかといいますが、実は共産党の市田副委員長が阿久根においでになると、それで私は共産党員でもなんでもないんですけども、ハンセン病問題で市田先生にお願いごとがあつて、おうかがいしたわけあります。その時に、私の故郷である大口市にも水俣病があるんだということをお聞きました。そして、その会場においてになっておられました大口市出身の被害者の方とお会いしたわけですね。山の中である大口になぜ水俣病があるんだろう、と素朴な疑問がありました。ところがその方がおっしゃるには、その当時水俣から行商に来ておられた方のお魚を食べておつたということでございます。そのようなことで、水俣病という病気が、実は海ばかりであるのではないんだということを、知つたわけなんです。山の中の大口までその魚が来ておつた、とまあそういうことですね、いろいろとお話をお聞きした記憶がございます。何にいたしま

しても、今、分断という話もありましたけれども、被害者全員救済というのが当然のことであらうと思います。県の責任、あるいはチツソの責任、あるいは国の責任、それぞれの責任においてですね、全員救済を果たすんだ、というのが当然のことであらうと思ひながら、聞かせていただいておつたわけでございます。

さて、ハンセン病問題に関する分断のことに入ります前に、ハンセン病療養所の今について少しく触れさせていただきますと思います。ハンセン病療養所の入所者は、平均年齢が八七歳と言われております。そして、社会復帰した者たち、退所した者たちは七七歳。まあそういう高齢化した平均年齢になっているということでございます。私の入所いたしました、鹿児島県の星塚敬愛園の入所者を見ますと、八八歳が平均年齢ということで、全国の入所者の多くの方がですね、もう既に認知症を患っているという齢に達しております。全国の入所者の数が約一〇〇〇名。そして、退所した者たちも約一〇〇〇名、ということのようでございます。療養所の入所者の方を、年間の死亡者数でちょっと割ってみますと、あと七、八年もすると、全国の療養所には誰一人として生きている者はいない、というような計算が実は成り立つわけあります。我が国は、ハンセン病患者に対して、強制隔離・絶滅政策を取りました。この政策、人権蔑視の政策によって、強制隔離のみならず、入所者の断種・堕胎を行いました。その結果、もはや我が国のハンセン

病元患者たちは、よく世間で絶滅危惧種という言葉が聞かれますけども、危惧種ところではない、絶滅種であります。まさしく、絶滅寸前であるというところでございます。強制堕胎による堕胎児の数を数えてみますと、全国で七六九六名。七六九六名が堕胎児として命を取られております。これは優生保護法がハンセン病に適用された一九四八年から、優生保護法適用除外になった一九九六年までの堕胎児の数でありまして、実は一九四八年以前に、優生保護法の適用のない三三年間にわたる非法下の堕胎児の数は、依然として闇の中というところでございます。これはおそらく万を超えるような堕胎児の数があるのではないかと、私はそのように推測をいたしております。

簡単に、療養所の今をご紹介したわけでございますけども、今まさしく新型コロナウイルスが猛威を振るっておるということで、全国の療養所それぞれ入所者に対する面会もできないという状況に置かれているわけでございます。実は私も今年で七〇歳を超えております。この裁判を起こしたのが五〇代だったはずなんですけど、既にもう七〇代を超えて、古稀とか言うそうなんですけど、その祝いをすることもなく、東京と鹿児島を行ったり来たりしています。非常に人使いの荒いハンセン病問題であるなど、そう思っているんですね。しかし、七〇歳を超えてしましますと、記憶力も鈍ってくる、体力も落ちてくる、そういうような中でもですね、市民の皆様方とともに助け合いながら、そして弁護士の方に助けられながら、ハンセン病問題の

全面解決に向けて、歩みを進めておるというが、今日の私たちの戦いでございます。

さて、本題に入りたいと思うんですけど、いわゆる分断というものは、繋がっているものを別れ別れに切り離すということでありまして、私たちハンセン病患者や、その家族らの人生はまさしく国家による分断の歴史であった、そう言って過言ではないと思うんですね。それは「らい予防法」という法律によって、ハンセン病患者と家族との分断を行い、さらには「無らい県運動」などの患者狩りを行うことによって、ハンセン病患者と社会との分断が、つまり共生社会を構成するそのコミュニティからの分断ということで、私たちハンセン病患者、家族らの生きる場を分断していった歴史が、我が国のハンセン病行政であったということを、冒頭に申し上げておきたいと思うんですね。

さて、本日私に与えられたテーマは、一九九八年に「らい予防法」違憲国賠訴訟をこの熊本の地に提訴して、二〇〇一年に原告完全勝訴を勝ち取った、あの戦いを通しての厚生労働省やあるいはハンセン病療養所による分断についてお話をしていたきたいということでございます。

私は「らい予防法」が廃止になった一九九六年、その当時はハンセン病療養所星塚敬愛園の入所者の自治会の副会長をやっております。自治会にも法廃止直前のころから、「らい予防法」が廃止されるらしいという情報が入ってまいりました。私

たち自治会の者は法が廃止されるのであるならば、当然のことながら、「らい予防法」が侵した人権についての謝罪、そしてそれに対する賠償も行われるであろうと、そう思っておりました。法律の廃止について、当時の厚生省の担当官であった法律の専門家と名乗るTという技官の方が、実は星塚敬愛園の自治会においてになられまして、「らい予防法」廃止に関しての説明を行ったわけであります。その中で、そのT技官が、「らい予防法」を廃止するというと同時に優生保護法の対象から、らい条項を削除するということを言われたわけであります。説明を受けていた私にはね、どうしても納得のいかないことがありました。まず、なぜ「らい予防法」を廃止するのか、という問いに対して、T技官が何と答えたか。「現代の医学的知見に照らし合わせてみても、もはや『らい予防法』は不要である」。そう回答したんですね。ハンセン病療養所にいる私たちにとって、現代の医学的知見という言葉はですね、実にまぶしい言葉でありました。そのような言葉そのものに酔ったかのように、自治会役員は深く頷いたわけであります。医学・科学とは言えないような「らい予防法」下の強制隔離下にあった者にとって、この言葉は待ち焦がれていた言葉であって、やっと医学の光が差し込んできた、涙が出るほど嬉しい言葉であったのであります。しかし私にはどうしても納得ができないことがございました。それは私の中では、「らい予防法」が廃止されるものなら、当然のことながら「らい予防法」が侵した人権について

の謝罪が行われるべきである。それに伴い、その償いが当然行われなくてはならない、そう思っておりました。しかし、ただ、「らい予防法」を廃止するというだけで、「らい予防法」が侵した人権等については何の言及もなされませんでした。そこで私は「T技官のおっしゃるその現代の医学的知見の『現代』とは、どの年次を指しておられるのでしょうか？」そのように聞いたわけであります。T技官はその答えを出しませんでした。ただ単に現代の医学的知見に云々という言葉を繰り返すだけでありました。全く答弁になりませんでした。そりゃそうだろうと思います。どの年次から「らい予防法」が不要になったんだと、必要じゃなくなっただんだということを書いてしまえば、それこそ国家賠償の対象になってしまふ、そういうことを恐れていたんであらうと思います。私は私の思いをTさんに告げました。それは、法廃止にあたっては当然のことながら、「らい予防法」を検証すべきである。その中で、「らい予防法」が侵した罪があるならば、当然のことながら謝罪と国家賠償をすべきである、等々を述べておいたわけであります。その後、T技官は、「優生保護法から、らい条項を削除します」ということを言いました。当時、私たち星塚敬愛園の入所者たちの平均年齢は七五歳です。T技官に「平均年齢七五歳の者を、今頃になって優生保護法の対象から削除して、どうして今更子どもが産めるのですか？」と問うたわけであります。T技官は無言でありました。「らい予防法」の廃止に関して説明に來たはずの厚生省の法律の専

門家だというT技官の説明は、何の説明にもならなかったわけであります。

一九九六年に「らい予防法」が廃止され、私は『このままではいけない。泣き寝入りでこの問題に幕引きをしてはならない』という思いで、法廃止直前から私のもとに取材に来ていた地元テレビ局の取材を受けておりました。また、積極的にテレビや新聞の取材を受けて、「らい予防法」によって受けた被害の実態を、マスコミを通して発信していったわけでありました。熊本訴訟の原告の団長を務めた故田中民市さんは、園内放送の「私たちの声」というコーナーに投稿され、放送係が『「らい予防法」は廃止になったが、このままでいいのか?』と自治会会員に対して、決起を促すメッセージを読み上げたわけでありました。と同時に、島比呂志は法廃止以前から九州弁護士連合会に對し、人権救済の訴えの書簡を投じていたということでもあります。田中民市を中心にして、一人一人に呼びかけながら、なんとか国の責任を問う方法はないかということで、話し合いをしている最中に、九州大学での歴史的なシンポジウムに出会ったわけでございます。そこからとんとん拍子に訴訟の話が出てきて、一九九八年七月三十一日に、本日この場において、熊本の弁護士である国宗直子先生ら多くの九州在住の弁護士の先生方のお力をお借りして、「らい予防法」違憲国賠訴訟を熊本地裁に提訴をしたということでございます。

さて、ここから「らい予防法」違憲国賠訴訟における、国

による分断に入るわけでありました。裁判を立ち上げたのは、鹿児島敬愛園の原告の九名、そして、ご当地熊本菊池恵楓園の原告四名であります。一九九八年当時ですから、確か全国の療養所の入所者は四五〇〇名から五〇〇〇名くらいの頃であったかと思えます。敬愛園でも四五〇名以上の入所者がいたと記憶しております。その中で、わずか九名の者しか原告として出てこれなかった。それには、国からの敬愛園の園長を介しての恫喝にも似た噂が入所者理事会に流布をされたことが関わっていました。それは、「訴訟を起こして負けた時には原告は園を追い出される」とか、「訴訟で負けたら今までの既得権がすべて失われる」などなど、まあよくも考えたものだと思われるような恫喝が次から次にでてきたわけでありました。入所者は国の脅しが怖くて、私たち原告に、「寝た子を起こさないでくれ」と言ってきたり、裁判を起こしている者たちに対して強く当たってくるということが日に日に激しさを増してまいりました。私が道を歩いていると、向こうからやって来る入所者はわき道に逃げていくようになりました。私が話しかけようとする、顔を背けるようにして逃げていく。原告と話をしていた、それが見られたら、自分も原告ではないかということ、仲間外れにされてしまう。そんな恐れがあったわけですね。園長は理事会と結託し、国の言いなりの行動を起こして行きました。ある原告に顔を合わせるたびに、園長から、「あなたは国のお世話になっているのに、何が不足で国を訴えているのか、お金

がそんなに欲しいのか」と顔を合わせるたびに言われたと言います。原告たちに対して、入所者もお金目当てで裁判をしている、と「らい予防法」による人権侵害を問うという本筋ではないところで、原告らを誹謗中傷するようになっていきました。ある軍人恩給をもらっている人は、「裁判なんぞやめてくれ！ 軍人恩給が見直されたらお前たちはどうしてくれるんだ！」と言っていました。ある宗教では、牧師が説教の中で、『らい予防法』違憲国賠訴訟という国を相手に裁判を起こしている輩がいる、それらの口車に乗ってはならない」と宗教まで一緒にやって原告らを攻撃してきたわけでありました。

裁判を起こした最初のことから、敬愛園では、訴訟関係者、つまり弁護士や支援の者たちには、療養所内にある面会人宿泊所には宿泊をさせないとか、公的会館も使用させない、そしてコピー機を使わせない。全くの村八分的な対応がなされたわけでありました。ですから、聞き取り調査に来た弁護士の先生方も、原告になりたての私たちの部屋で雑魚寝をする。そのような状況が続いたわけでありました。いくら暑くてもお風呂にも入れない。そういう中で戦いが始まっていったわけでありました。裁判が進んで、熊本地裁の裁判官による出張尋問が行われることになりました。園内放送では自治会長が放送に立ちました。そして、出張尋問の会場になる公会堂周辺には立ち入らないことを何度も何度も繰り返し園内放送しておりました。また当日、公会堂周辺のみならず、園内の至る所に立て看板が立てられま

した。それは、「出張尋問につき、立ち入りを禁ず」というような物々しい雰囲気がありました。いかにも「裁判の原告として出たら、このように尋問を受けている。大変なことになるんだぞ」ということを入所者に知らしめるためのようになるんだぞ」というわけです。裁判など見たこともないような入所者にとつては、大変な恐怖を覚えることになりました。国は園長と結託して、原告を出さないための手を打ってきて、園長は自治会を自分の側につかせて、国の言いなりにさせていく。「らい予防法」という法律によって被害を受けた当事者同士を国は見事に分断していきました。

私たち九名の原告は、原告団の代表であった田中民市さんの家で、原告団集会を持っていました。ある日、私とともに立ち上がった上野正子さんが私にこう言いました。「豎山さん。自治会からこんなにいじめられているのに、どうしてあなたは怒らないの？ 私たちはまるで悪者よ。いつもは気の短いあなたがなぜ怒らないのか、私にはあなたの気持ちが見えない。」正子さんは、入所者や園長から顔を合わす度に、嫌がらせの言葉を浴びせられていたわけでありました。あまりにもひどい嫌がらせに正子さんは怒っていました。私は正子さんに、「正子さん。嫌がらせをしてくる入所者も同じ被害者なんです。その被害者同士が喧嘩をしたら、喜ぶのは国です。国の思うつぽになっちゃいます。ここは辛いでしょが、辛抱してください。」そう言いますと、「気の短いあんたがよく辛抱してるよ」と、ま

だ正子さんも怒りは収まりません。しかし、正子さんも分かっているのです。あまりにも執拗な嫌がらせに耐えかねての発言だったのです。それでも弁護士からの要請を受け、一人二人と原告の掘り起こしをしていく。そのことが私たちの力にもなり、国を追い込む最大の力に変わっていったんだと思います。

裁判を始めた当初、全国の自治会を束ねている全国ハンセン病療養所入所者協議会（全療協）も、裁判には反対の立場でありました。全国一三の療養所が反対している以上、全療協本部も身動きが取れないのです。熊本地裁に端を発した国賠訴訟は東京地裁へ飛び火し、さらには岡山地裁へと提訴が行われていました。その間、私は奥州仙台に飛びました。仙台の東北三県で提訴ができないかと、現地の弁護士と話し合いにも行きました。後に、東京地裁での提訴に結びついていくわけでありました。また、福岡に東京の弁護士が集まる機会があるから、福岡で豎山に「らい予防法」下で受けた被害の実態を語ってほしいと言われ、お話もさせていただきました。その後の東京への提訴へとこれも結びついていったわけでありました。国による裁判に対する分断の中で、全国三つの地裁で戦っていた訴訟原告団を一つにまとめ、そして全国ハンセン病国賠訴訟原告団協議会（全原協）を作りました。元全療協会長も務めた曾我野一美さんを会長に据え、そして全療協との裁判についての話し合いを進めていただきました。曾我野さんや弁護団の皆様方の協力を得て、あれだけ厳しい対応をとっていた全療協も、控訴断念の

ときには、全国の自治会の会長らが東京に結集していました。そして、総理官邸に小泉総理との控訴断念の面談に行く私たち全原協の代表らを拍手で見送ってくれたわけでもあります。

戦いというのは色んな局面が現れてきます。それらをどのように読み解き、どう対応していくかが、大事であろうと思います。さて、その後、私たち原告として裁判を戦った者たちと、星塚敬愛園の自治会との関係はどうなったのか、ということでございます。裁判闘争のとき自治会の副会長を務めていたのが、現会長の岩川洋一郎さんであります。岩川氏は裁判が済んだ直後から、原告たちとの交流を進めてくれました。まだ自治会が分断されている時代に鹿屋の地でハンセン病市民学会を開くということが決定を見たようで、市民学会の会員でない私に、自治会との中に入って、なんとか市民学会が開催されるような状況を作ってくれという要請を受けました。しっかりと根回しもせずに、勝手に市民学会の開催地を決めた市民学会の幹部に私は怒りました。しかし、決定した以上何とかせねばならない。そう思い、当時から自治会長を務めている岩川氏に会いに行きました。まだ当時はどこかぎこちない関係がありました。しかし、裁判で分断してしまつた入所者をこの市民学会で一つにしたい。そういう私の思いを岩川会長が受け止めてくれたのです。強固に反対をしていた裁判当時の会長も、二日間通つて、延々何時間という話し合いの末に、パネルディスカッションに参加することまで了承してもらい、そして園当局も協力を

するということで、無事に開催することができたのであります。その後、療養所の将来構想を進める会を立ち上げる時、支援の会の会長とそれから弁護団の徳田代表、さらには私もその中に入り、現在も将来構想を進める会のメンバーとして務めております。また療養所の人権委員会のメンバーにも、支援の会の代表と、そして徳田弁護士、さらには私も加わっております。高齢化した自治会では、役員のなり手もなく、ハンセン病問題のあらゆる局面で岩川会長から相談を受けております。まるで兄弟のようなお付き合いをさせていただいている今日であります。裁判当時の立場で証人に立ち、国の分断作戦の片棒を担ぐことになった元園長は、自治会創立七〇周年記念で、思いもしない言葉を発表しました。私と同じ会場で直前まで話し込んでいた元園長です。裁判後、私は、元園長が裁判で証言をしたのは、国の強い要請を受けて、思ってもいない証言をせざるを得ないという立場が言われた言葉だとそう思っております。したがって、元園長との関係は、裁判が終わったらノーサイドという私の思いで接していたためか元園長も心を許してくれるようになっていました。七〇周年記念式典が始まり、来賓として登壇した元園長は、「私は悔いています。私は悔いていることがある。それはあの裁判で国の証人として、証言したことだ。」そう言ったのであります。よっぽど後悔をされていたんであらうと思います。その後名誉園長はお亡くなりになられました。が、まるで遺言のような言葉であつたと、そう思っております。

以上、「らい予防法」の国賠訴訟を通しての国の分断作戦にどのように対応してきたのかということの一端を、お話をさせていただきました。足りない点は、私たちの訴訟を弁護団として導いていただきました国宗弁護士から補足していただけたらと思っております。またハンセン病家族の裁判については、家族の裁判の中核となった原告らの、れんげ草の会を発足当初から面倒を見てくださいました、国宗先生にお願いをしただけかと、そう思っております。

ちよつとだけ時間をいただいて、ハンセン病患者の家族の裁判における国の分断工作について、私の立場からお話をさせていただきたいと思ひます。家族の裁判の顧問として、私は原告らの発言の場を作る、そういう役割分担であつたろうと思うんです。そして議員懇談会の開催、あるいは自民党から共産党までの全政党にハンセン病問題のワーキングチーム、プロジェクトチームを作つていただきました。それらの政党に対しても、家族の被害の訴えを行つていたわけであり、私自身もれんげ草の会当時からの会員として参加をさせていただきました、どこかの時点でですね、家族の裁判をと考えてきた者の一人であり、ます。家族の裁判に対する国の分断について言えば、国は、一貫して、「らい予防法」は患者に対してとつた政策であり、患者の家族に対してとつた政策ではない、したがって家族には被害を及ぼしていないということを言い続けてきたわけであり、一見まことしやかな言い分であるんですね。これを聞いた

家族らは、原告になることにためらいを覚えた者もいるかもしれませんが。まず私が挙げたいことは、元患者らの裁判と家族の裁判は別であるという国の立ち位置であります。その立ち位置は、「らい予防法」による被害など家族に及ぶはずがないということでもあります。しかし、例えば五人家族であったとする。父親が強制隔離をされる。残されたお母さんと三人の子どもに何の被害もなかったなどということがどうして言えるでしょうか。残された母親は三人の子を抱えて、父親の代わりも背負って働かなくては行けない。あるいは長男は家計を助けるために、行きたい学校にも行けずに仕事に就く。そんな中で、長女の縁談が出てくる。これが、父親がハンセン病だということで縁談が破談となる。そういうこともございます。破談となった人は、あるケースでございますが、悲しみのあまり自死に追いやられてしまう。そういうこともございました。このようなケースはいくつもあるわけであります。我が国の家族訴訟に対する対応は、まず元患者の裁判と家族の裁判を分断することであったと、私はそう思うんですね。

しかし我が国は、二〇〇三年に思いも及ばないことをやっております。それは、日本財団が国連人権高等弁務官事務所でのハンセン病をめぐる差別問題に関する働きかけを開始していたことと関係しています。その後、二〇〇四年の国連人権委員会、ハンセン病と人権について、その日本財団が発表したことがきっかけとなって、同委員会小委員会がハンセン病の犠牲

者とその家族に対する差別の問題の調査に着手をしたわけであります。その後も日本財団は、この日本国連人権高等弁務官事務所及び国連人権委員会、あるいは小委員会への働きかけや調査協力を継続しております。そして、小委員会での関連決議の採択に導いておるわけでもあります。一方、日本財団に呼応して、ハンセン病の人権問題に積極的に取り組む日本の外務省が、二〇〇七年に笹川陽平会長を日本政府のハンセン病人権啓発大使に任命しております。そして、日本財団と外務省とが一致協力して、何を行ったか。人権外交を展開する態勢を整えていった。そして、二〇〇八年の国連人権理事会において、日本政府はハンセン病患者、回復者及びその家族に対する差別撤廃決議案を提出しております。これは、他五八か国が共同提案国となっております。そして、日本政府と日本財団が各国政府に理解と賛同を求めて回った結果、決議案は全会一致で可決をされたということでございます。二〇〇八年です。そしてこの決議に基づき、なんと国連人権理事会、諮問委員会が差別撤廃のための原則とガイドラインを策定いたしました。二〇一〇年一二月には国連総会本会議において、ハンセン病患者、回復者とその家族への差別撤廃決議と原則とガイドラインが一九二か国の全加盟国の全会一致で採択をされたのです。これは外務省の管轄でございます。我が国の外務省が国連に対して働きかけたこの決議はいったいなんだったのでしょうか。ハンセン病患者回復者とその家族への差別撤廃決議である。ということとは二〇〇八

年、あるいは二〇一〇年にはすでに我が国は家族への差別があるということを確認していたことに他ならないのです。ハンセン病に対する差別は、二〇〇一年の熊本判決ですでに明確にされており、す。「らい予防法」が偏見や差別を作出し、助長したというのが熊本判決であります。そうなりますと、この家族への差別なるものは当然「らい予防法」に起因したものであるということになるわけであり、しかし我が国は「らい予防法」は患者を対象とした法律であると言い張りました。これは元患者らと家族との分断であります。さらには、家族にも差別があるとする我が国を代表した外務省と厚労省との分断を今度は図ったというほかない。全く支離滅裂な我が国の対応と言うほかないのであります。我が国を代表した外務省は国連における決議を扇動したわけであり、当然のことながら、ハンセン病家族裁判における我が国の対応は、裁判で争える立場では、もはやなかったはずであります。それならば、原告らが提訴した時点で、国は当然のことながら、和解協議に入ってほしいということを原告らに申し入れるべきであった。それが責任ある国の対応であるはずであります。

さて、家族の裁判に対する私の立ち位置は、先ほども申し上げました。家族裁判の原告たちを孤立させない。そのためにも市民を常に戦いの現場に結集する。そして家族の立場を理解している市民がこんなにもたくさんいるんだという安心感を生み、そして市民とともに戦っていく、そういう市民団体の立ち

上げを行う。この新たに結集した市民たちが判決前夜集会、あるいは判決直後からの東京での控訴断念の戦いの核となつて戦ってくれたわけであり、そのような原告を陰で支える役割を行ってきた関係上、裁判の傍聴やあるいは原告団の発言を、全くと云っていいくらい私は耳にしていなかったわけであり、訴訟進行上の国の分断等に関しては、先ほど申し上げました通り、弁護団の国宗先生の方にお聞きをいただきたい、そう思っております。

なお、私からではございますけれども、国宗先生は一九九八年当時の「らい予防法」違憲国賠訴訟をこの熊本の地でやるんだということを経験に言い出した先生でもあります。私たちは九対四で熊本の原告よりも多数であったのに負けたと言ったんですけれども、もともと私たちは福岡で裁判をやるうと言っていました。ところが、国宗先生と藤田先生が乗り込んで、「いや熊本でやるんです」と。「なぜ熊本ですか？」と言ったら、「福岡にはハンセン病療養所がない。だから療養所がある熊本でやるのが大事なんです」ということでして、分かりましたと言つて、うちの原告たちを、私は帰って早速口説いてですね、まあ苦労しました。しかし、後でその話をいたしましたならば、国宗弁護士がなんて言ったかという、「豎山さん、騙されてよかったでしょ」と、ニコッと笑われました。確かによかった。私たちはそういうことがあって、そしてまた二〇一六年の家族の裁判に突入していくわけであり、なかなか家族の裁判も、

家族の皆さんの立ち位置が違っていて、いろいろとありました。だから、なかなか裁判が起こせなかった。そういう中、国宗先生は家族の裁判以前に、れんげ草の会というものを作ってくださって、そのど真ん中にでんとおられて、この家族の者たちの面倒を見てくださった。本当に私たちハンセン病元患者たちと、あるいは家族たちと歩みを共にしてくださった弁護士は熊本がこの国宗直子先生が一番であろうと私はそう思っております。今日、目の前にいらつしやるから言うわけではなく、本当にそれが真実であります。どうか後のことは、この国宗先生にお任せをいたします。ありがとうございます。

国宗直子さんのお話

国宗…皆さんこんにちは、弁護士为国宗といいます。熊本で弁護士の仕事をしております。今日は分断についてのお話ということで、私は堅山さんと何の打ち合わせもしていなかったんですが、ちょうど、堅山さんとは問題の切り方が違う場面でお話してみようと思います。

ハンセン病の問題でいうと、堅山さんが言われたように、隔離政策の歴史そのものが、ハンセン病の患者あるいは家族を分断する歴史であったというのはまさにその通りで、しかも、その分断は徹底していて、家族の話を聞くと、本当に被害を受けている家族はみんな孤立して存在しているという状況だったわ

けですね。だからまさに分断の歴史だったというのはその通りだと思います。私が今日お話ししようと思うのは、その分断された人たちの人権を回復していくたたかいの中で、その分断の問題というのがどういう風に現れてくるのかということ、それをどうやって克服していくのかということについてちよつとお話したいなと思っております。というのは、先ほど、川本さんのお話聞かせていただきましたけれども、私は実は水俣病訴訟弁護団のメンバーでもあるわけですね。水俣病に、もし私は出会ってなかったら弁護士になつていなかったと思うほど、水俣への思い入れはあるんですが、ハンセン病問題を始めてからどちらかというとハンセン病問題の方に軸足を置いていて、最近水俣の方は本当にちよつと関わるくらいの形でしか関わっていないんですが、実は私の中で非常に大きな問題があつて、水俣病問題がなかなか最終解決に至らない。そのことはなぜかという、先ほど川本さんが話された、水俣病の歴史もやはり分断の歴史だということですね。

ちよつと話がそれるんですけど、ナミビアという国がアフリカにあつて、そこは以前ドイツの植民地だったところなんです。アフリカ人の部族の人たちがドイツに対抗して反乱を起こすわけです。すごい反乱を起こしたりするんですけど、その時の歴史の本を読んでいて思ったのが、水俣と同じだな。どうしてそうかという、ある時期はA部族ということが中心になってドイツ軍とたたかうんですね、その時にホッテン

トットという言葉ができるんですけど、あれは差別用語で、ドイツ人がホッテントットを絶滅せよといったところからその言葉がでてきているんですけど、本当に殲滅されるんですけど。そして生き残った人たちは砂漠の方に逃れて細々生きていくんです。ところが、その次にまた反乱がおきるんですけど、今度は別のBという部族が反乱を起こすんですね。その後、第一次世界大戦が終わってドイツの支配も終わるんですけど、今度はどこが支配するかというと、アバルトヘイトの南アフリカなんです。その時に南アフリカとたかう部族が今度はC部族なわけです。現地の人たちがみんな一斉になって一緒にあってたかえばもっと力が出せたんじゃないかなと。これは水俣病のたたかいに似てるな、いつまで経っても独立のたたかいが終わらないなっていう、そういうイメージをナミビアの歴史から思ったことがあって。私としては、団結してたかうことがなくて分断される歴史のままでは国に勝てないという気持ちがすごくありました。どうすればみんなが団結して割れずに、国の分断をただ受け入れるのではなく、国とたたかっていけるのかというところが、とても大事なテーマになるんじゃないかということ私なりに考えました。

ハンセン病の問題で、豎山さんたちは最初一三人だったんです。この一三人が立ち上がると決めて、裁判を始めるということになったときに、運動をどうやって作っていくかということのことを思いました。当時、色んな裁判の支援をしている人たちに相

談しても、ハンセン病に対してはやっぱり差別意識があるから、市民運動を作るのは無理だと言った方もいらつしたんですけど。でも、無理では困るので、何とかしなきゃと思っていたんですが、私たちが裁判を始めると、結構色んなところから色んな人たちが声をかけてくださるということで、運動が始まっていきました。

ここまでは前置きなので、中身に入っていこうと思うんですけども、ちょっと歴史っていうと大げさなんですけど、駆け足で行きます。実はハンセン病者に対して強制隔離を定めた法律は三つありまして、時代とともに一九〇七年、一九三一年、それから一九五三年のものです。注目すべきなのは一九五三年の、ひらがなで「らい」と書く「らい予防法」なんですけども、これは今の日本国憲法ができた後の法律なんですよ。基本的人權とか声高にうたわれた日本国憲法の裏側でこんな法律があったというのは、私が最初にこれ知ったときすごくショックだったんですけども、しかもこのあと四三年も続いてしまうのです。この法律が廃止されたのは一九九六年。日本国憲法の下で四三年もこんな法律が生き続けていたっていうのは最初これを知ったとき私にはとても信じられない出来事でした。

豎山さんたちが立ち上がります。一九九八年に国賠訴訟の提訴をするんですね。そして二〇〇一年に判決を取ります。ここも私が水俣から学んだことの一つなんですけど、たたかうときは急がなきゃいけない、ぐずぐず何年も裁判にかかってはだめだ

という気持ちがあるんですけどね。提訴したときに元気があった方が、もう和解する頃には亡くなってしまっているという状況が水俣病ではあって、そんなことにはしたくない。そもそも、堅山さんたちが提訴を決めた時に、さっきお話に出てきた原告団長になっていた田中民市さんはすでに八〇歳を超えてたんです。当時、国賠訴訟は一〇年かかって当たり前みたいに行われていて、一〇年かかったら田中さんは九一歳になるので、これは大変だということで、私たちは三年で裁判をやるという宣言をしたんです。「三年で国賠訴訟ができるわけない」とか言われたりしたんですが、できないことをやっていくのがうちの弁護士ということで、大風呂敷を広げて、大言壮語を言い続けて実現していくというのがうちの伝統なんですけれども、本当に三年で判決を取ったんです。

最近聞いた言葉なんですけど、水俣病の裁判も含めて、私たちがやるこういう裁判を「政策形成訴訟」、つまり政策を作っていく訴訟と呼んでいるそうです。つまり、私が一〇〇〇万円ほしいから裁判やっているわけではなくて、この状況を変えなきゃいけない、新しい制度を作らなきゃいけない、だから裁判をやっているということです。そして、勝訴判決が出れば必ずそれに沿った法律を作らせていくということがとても大事ななんだと思います。

「らい予防法」違憲国家賠償訴訟の判決は二〇〇一年五月一日に言い渡されましたが、その年の六月二日には新しい

「ハンセン病補償法」という法律ができました。これはとても大事なことだったと思います。そして、二〇〇八年には、ハンセン病問題について国が行う施策についての基本的な姿勢を決めるための法律ができます。これは、本当は「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」という名前がついているんですが、私たちはこの法律を常に「ハンセン病問題基本法」と呼んでいます。さらに、二〇一六年、家族訴訟が起きます。そして、その判決が二〇一九年に出ます。これは六月の判決だったんですが、一月には「ハンセン病家族補償法」という新しい法律を作らせました。こうして今に至っているんですが、私たちは、偏見差別をなくして、家族関係の回復が実現されていくような、そういう社会を早急に作り上げてくためのたたかいを展開しているところなんです。

分断の危機というのとはもと分断されていたり、先ほど堅山さんのお話があったみたいに、みんなで提訴するのが大変だったりに表れているんですね。私はよく学生さんにお話しするときは分かるように話してらっしゃるんですけど、例えば、親のすねをかじっている学生が親を提訴するのはなかなか難しいだろう、仕送りが来なくなることを考えると、親を被告にして提訴するのは無理だと思うのではないでしょうか。そうすると、やはり療養所にいる入所者が親とも言える国を被告にして提訴するというのも相当の決意が必要だったと思うんです。その中で、それぞれのハンセン病療養所の入所者自治会と

うまくいかないということも、各療養所の原告団の中で発生した問題なんです。私が担当していた療養所でも、原告は同じ入所者から「おい一億」と呼ばれたりしていました。なぜかというと、国に対して一億円の請求をしていたからなんですけれども、どこの療養所でもそんな話があったんです。

それはそうなんです、とりあえず始まってしまったらどうやって運動をそこに集中させてたかっていくかっていうことが問題になりました。まずその始まりの時なんですけど、さっきも言いました、それ難しいんじゃないっていう市民運動経験者の人がいたりする中で、実は支援する人たちのグループがいくつかあることがわかってくるんですね。一つは宗教団体の人たちです。特にあの時一番大きく動いてくださったのは浄土真宗の東本願寺派の人たち。この人たちがまず先に、真っ先に裁判するって聞いて私のところに訪ねてこられたりしました。こういう宗教団体の方々。それから色んな市民団体でもですね。これまでの差別に抗する色んな団体があって、その団体の人たちがすでに療養所に入って長年活動されているということがわかってきました。そういう方たちにも支援をお願いしていくということになりました。ただ、これまで療養所の中でいろいろ入って活動してきた人たちには、それぞれ政治的な色合いがあったんですよ。はっきり言うと支持政党が違うというようなことなんですけど、私たちは一切その話を聞かない、どこのこういう政治的な傾向を持っている団体というのは聞か

い。療養所の中でどういう活動をしてきたということを一生懸命聞きました。どういう苦労をしてきたかということも一生懸命聞きました。今の状態の中でどういう風に問題を克服していけばいいかということも一生懸命聞きました。私たちはハンセン病問題でいえば、せいぜい一九九六年に九州弁護士連合会が取り組んだときにはじめてこの問題に触れた人間なわけですね。そうすると新参者です。それ以前に何十年もこの問題にかかわって一生懸命やってこられた市民の方たち。それから療養所の中でそれこそずっとたたかい続けてこられた入所者の方たち。この人たちはみんな私たちの先生なわけですね。だからとりあえずお話を聞くということをとっても大事にして始めました。色んな政治的な立場を問わない、そのことで議論しないということにもものすごく気を付けました。そのうちにそれぞれの立場で皆さんが支援してくださるという状況を生み出すことができたので、実はこの最初の二〇〇一年の判決が出るまでに、一万〜二万くらいの市民の署名を裁判所に出してるんです。公正な判決を出してくださいって署名を出してるんですけど、実はこれは最初に私たちが呼びかけたわけでも何でもないですよ。自然に署名が集まりました。それで、「じゃあもうちょっと広げましょう」みたいなことで改めて署名用紙を作り直したりとかしたんですけども、このために私の事務所に署名が届いてくるんですけど、署名は色んな形があるんです、うちの団体で作りましたっていう、その団体の署名用

紙で送ってくるんですね。だから色とりどりの色んな署名を裁判所に次々持っていくことができる、そのこと自体はともよかったなど、色んな人が力を合わせることができたなど思っています。

分断の危機というものを乗り越えるのは、実はその時は大変だと思っただけですが、今思うと結構危機だったなと思うのは、二〇〇一年の判決が出た直後のことですね。判決で勝つまではどういう立場であれ、例えば入所者や退所者や遺族や非入所者や色んな人が原告の中にいたんですね。みんな勝ちたいと思うので、勝ちたいというその一点についてはもう色んなことを協力し合うわけです。ここは一致していますので、割れようがない。ところが、いったん判決が出てみると、退所者の補償金、賠償金は非常に低く抑えられたということがありました。それから沖繩も低く抑えられたということがありました。「こんな判決に従えるか」と退所者が言っても全然おかしくない。私たちは、「国が控訴断念した」と声高く言っているんですが、原告側にも二件の控訴断念があったんですよ。一つは沖繩の原告。その時は判決を受けた原告は第四次の提訴の人たちまでの一二七人しかいませんので、たくさん被害者が残っていました。その原告の中には実は沖繩の原告は数人しかいなかったんです。この数人に対する賠償額が低く抑えられたことについて、まずその沖繩の原告と話をして、「とりあえずこの判決でいい。今後の補償を求めてたたかうから」ということ

で同意をもらって控訴しないということに決まりました。次は退所者原告団。これは結構力があってですね、この人たちがこんな判決はけしからんって言いだしたらそのあとの団結したたかいはなかったかもしれないと思うんですね。その時に退所者原告団と話し合ったんですが、弁護団は退所者原告団に約束しました。絶対に退所者原告団が不満に残るような解決にはしないと。「頑張るから、だからこの後の交渉にかけよう」という話をしました。退所者は「分かった。一緒にやっていこう」ということになったんですね。

私はこの時の話はとても印象的に覚えているんですけど、その当時の退所者原告団って、結構みんな太っ腹だったと思うんですよね。言葉は乱暴だったりするんですけど、「よし分かった」と言った時には本当にみんなたたかう決意になっていました。ここが面白いところでですね。判決が出たのに、そこからたたかうという話をするわけです。それがなんの話だったかは後でお話ししますが、だから私たちは色んな立場の違い、利益の違いがあるにもかかわらず、判決後も団結してたたかい続けることができた。ここがすごく大きいと思っているんです。というのも恒久対策とかを要求するんですけど、入所者の要求と退所者の要求って全然違うわけです。入所者は療養所の中でどうやって安心して生活できるか、死ぬまでどうやって安心して生活できるかという、そこがすごく大変なところなんです。ところが、退所者は社会の中で生活していて、療養所の状況が

どうあろうが、社会の中でどうやってちゃんと生きられるのかということを考えているので、国に要求する政策が全然違うんです。だからある時の協議会では退所者の利益がテーマになり、あるときは入所者の問題が中心になるんですけど、退所者は入所者のためにたたかい、入所者は退所者のためにたたかう。常に一致団結して、結集してたたかうことができています。なんでそうなるかという、終わったら負けるとみんな思っているんです。たたかをやめたらみんな負けると思っているんです。そのことで、お互いのためにたたかうことが自分たちのためになるという確信をこのたたかいの中で持つことができたんだと思います。

実は、二〇〇一年の補償法ができた時に、原告団は大きな危機に直面します。五月一日の判決の後、六月二日に法律ができたとお話をしましたけれども、この法律は、中身的には非常に素晴らしい法律です。すべての被害者に対して判決の基準と同じ補償金を出しますというんですから。すべての被害者を救済しろというのが私たちの要求ですからこの法律に何の文句もつけないところはないので、しかも判決が差別していた沖縄も差別しないという法律にしてくれたんです。だから私たちはこの法律について文句は決して言わないと決めたんです。すると、国は何をしてきたかと言うと、実は判決当時全国で、ちょっと今正確な数字を覚えてないんですが、八〇〇人くらい原告がいきました。判決を受けたのは一二七人なので残っているわけです。

ね。加えて、勝訴判決直後に九二一人がさらに提訴しました。これは、控訴期間の二週間の間に判決を守ろう、みんなが提訴することが判決を守るということになるという働きかけを各療養所でやってみた成果なんです。すでに原告は千七百何十人っていう形になっています。この人たちをどう解決していくかっていうことが今度のたたかいの課題で残っていたわけです。すると国は、ハンセン病補償法ができた時、「補償法で請求したほうが早くお金が出る」「原告団に入ることはない」と言うわけですね。私たちは、補償金じゃなくて、原告団に入って原告として賠償金を取ろうと、国の責任を明らかにしようということと呼び掛けていたんです。だけど、実際にお金が出るといふのであれば、私たちは国がこれを早く実施することにも文句は言わないわけです。早く権利が実現するならないことなので、どんどんやってくください。その代わり何をするかって言う、負けないくらい賠償金を早く出させるということなんです。だから、判決直後から国との和解交渉に入りました。六月と七月はその話でめいっぱい、七月の中頃くらいだったと思いますけど、国との和解協議を終了させました。後は手続きをやってお金を出させるといふことをやっていくので、第一回目の補償金と第一回目の和解後の賠償金とはあまり変わらない時期にお金を出させることができたんですね。裁判中より大変だったという判決直後の話だったんですが、やはり国は、別に間違ったことを言ったり、しているわけではないが、それで原告団を切り崩そうとし

ていた、と私たちは見ました。ただ、原告団を切り崩させるわけにはいかないので、これを守るためにはとりあえず走り回って頑張るしかない。ここがとてもこの時の分岐点としては大事なことだったと思います。何が大事かというと、補償金というお金が出るから原告団とか解体してもいいし、原告団に入らなくてもいいしという風潮を作らなかつたということです。

なぜかということをお話したいんですが、私たちは裁判の途中から、もうほとんど初めに近い時からですけど、全面解決要求というものをまとめました。それは大きく言うと四点に分かれるものだったので、まずちゃんと謝罪して名誉回復を払えということです。それから後どうやってこの隔離の被害者が生きていくのかということについては恒久対策をやるということです。この恒久対策は二つの柱があり、療養所にいる方たちの色んな生活保障、医療保障という柱と、もう一つの柱は社会復帰した人たちの社会復帰を支援していく対策をどうするのかということなんです。それから真相究明。この四つの目標を掲げて原告団は結成されていて、裁判をたたかっていたんですが、この四つの中で実は裁判で実現できるのは一番しかないんです。二番、三番、四番というのは裁判ではそもそも解決できないものを目標に設定している、原告団を解体するわけにはいかないんです。一番、三番、四番をどうやって実現していくかというのが次の課題な

ので、だからこういう政策形成訴訟では、判決で勝ったで終わらない。勝つことはとっても大事だけど、その後はもっと大事な、もっと大変という事態が続いていくことになります。

私たちは、幸い本当に原告団を割らずに済みました。たたかいの中で分断されるということがなくて一致団結して国と対峙できました。先程の堅山さんのお話にもあったんですが、最初は、自治会の連合体である全療協は、原告団と足並みをそろえていたわけではありません。だけど、この判決を、控訴断念を勝ち取るたたかいの中で足並みをようやくそろえることができて、そのあと全療協は原告団と一緒にやっていくということを決議してくれるんですね。それで、ともに交渉団を作るんです。ハンセン病訴訟の交渉団というのは、正式には、堅山さんたちの原告団、全療協、そして私たちの弁護士団、この三者から成り立っています。この交渉団が毎年要求を出して、それを実現していくのです。この交渉団と国との定期協議というのは最初の年は一年間に四回協議をやったんですが、次の年の二〇〇二年から毎年一回必ず協議をやって、そこで要求をおぼつて、議論をたたかわせていく。場面によっては席を蹴って帰ったこともありました。確か、この時は国から拒否的な、それはできませんという回答が来るからその時はみんな席を蹴って立とうと決めていたと思います。それで、その時の協議は中断されて、その年は二回目の臨時協議を持つということもありました。そういうことをしながら国との交渉を続けてきています。こうし

て要求を実現してきました。その中で、大事なことは、賠償金では退所者と入所者では非常に大きな差があった中で、「必ずこの差は埋めるから」と私たちが退所者原告団と約束したんですが、それを果たせたことです。その結果、退所者給与金という形で退所者にも毎月ちゃんと通常の生活が送れるくらいの給与金を国から支払わせることができています。入所者はちよつと金額が少ないんですが、やはり給与金が出ています。それから療養所での生活や医療保障についてもいろいろなことが実現してきています。今大きなテーマとして将来構想の問題も国といろいろ話しているところです。ただ今年は、新型コロナウイルスの影響で協議の予定が飛びました。ちよつとこれからまた組みなおしていかなきゃいけないので、さあこれからどうしようっていうところを現在弁護士団で話し合っているところです。とりあえず今年の要求項目だけはきっちり出そうということは今話しています。

もう一つは、団結できるとどういうことができるかという話をしたいと思います。実は、私たちはさっきの日本の隔離の歴史の中で、実は裏の話になるところを省いていたんですが、戦前日本の植民地だった韓国や台湾でもハンセン病者の隔離政策は実施されました。日本政府は二〇〇一年にハンセン病補償法ができたときに、法律上は戦前だけに存在した療養所に入ったことがある人にも補償を認めたいんです。だったら戦前の日本が支配していた地域にある療養所だったソロクトという韓国の療

養所や台湾の療養所に収容されていた方々にも補償を認めるべきじゃないかということで、台湾と韓国からハンセン病補償法に基づく請求をしました。すると国はだめというんです。理由は、補償法にそれらの療養所の名前が書いてないからだ。そこで裁判を起こしました。その裁判は二〇〇四年から始めたんですけれども、二〇〇五年に判決が出ました。この裁判は、本当に全国的にみんなに支援してもらって、入所者、退所者の人が東京地裁で裁判やったところ、毎回いっぱい支援者の方が押しかけてくれるわけです。自分たちの裁判でもないのに。でも自分たちと同じことだと言うんです。同じような被害者が切られるとしたら、それは自分たちの問題だって言ってくれるんですよ。とてもありがたい思いをしました。そして二〇〇五年に出た判決では補償の有無が割れたんですね。というのも韓国での療養所に収容された方々が起こした裁判と台湾の療養所に収容された方々が起こした裁判とは同じ東京地裁でも違う裁判体で審理されました。同じ日に判決を出してくれという要請をして、一〇時から韓国、一〇時半から台湾という順で判決が出たんですが、韓国の原告は負け、台湾の原告は勝ちました。そこで私たちは、台湾については国に対して控訴するなっていう要求を出して、自分たちが負けたソロクトについてはさっさと控訴しました。国には控訴するなという運動を展開して、毎日厚生労働省の前で集会やっただんですが、厚生労働省も、結局この問題を解決するにあたっては、控訴審でたたかうつもりでは

ないということを当時の厚生労働大臣は言うんですね。よりよい解決を図りたいと思うけれども、とりあえず今日控訴しますということとで控訴期限の最終日に控訴するということになりました。そして、本当に新しい仕組みを作りましようとか国は言い始めるんです。具体的には、新しい法律を作りましようか、それともそれまでのハンセン病補償法の中にこの二つの韓国と台湾の療養所の名前が入るような形にしましようかというんですね。私たちは当然二つの療養所の名前が改正法に入るべきだという立場だったんですが、国は最初、別の新しい補償法を作ろうかと思うと言うんです。そうすると、ハンセン病補償法では最低の補償額が八〇〇万円なんです、新しい補償法はそれより切り下げた七〇〇万円とか六〇〇万円の補償額にましようとか動き始めたんです。そこで、私たちは新しい法律はダメで、統一的な補償制度にしろという主張をして、色んな人たちに声を上げてもらって活動しました。もう一点あります。私たちは国に対して非常に傲慢な態度に出ることができたんです。韓国から裁判を起こした人たちは、その当時百十何人かいたんですけれども、窓口は全部私たちです。他にいません。日本で窓口になるのは私たちだけなので、韓国の人たちは私たちのところにお願するしか自分の権利を果たす方法がないという状態になっていました。私たちは韓国の弁護団と本当に近い協力関係を得ることができて、本当に韓国の代表団とも団結して頑張ったんですけれども、国には「新しい法律を作るなら作っ

らどうですか？」と言ったんですね。本当に傲慢にそう言いました。「誰もその新しい法律に基づく補償額では補償請求できません。私たちは控訴審でたたかいますから」と言いけることができました。ここで、もし何人かの人が「いや私は新たな補償法がいいです。五〇〇万円でももらえないういいういいます」という人たちがいたら私たちはそういうことは言えませんでした。でも韓国の被害者は韓国の弁護団で一本化して、窓口も日本の私たちで一本化していたので、「新たな法律を作ってもいいですよ。裁判をたたかい抜きますから。誰もそっち行きませんから。無駄な法律になりますよ」ということを豪語できた。これがその時の団結の力なんだと思います。私は本当に被害者を割らないことが大事だ、団結することが大事だということを心しながらこのハンセン病問題に取り組んできたんですけれども、本当に自信を持って言えます。団結の力こそが未来を作るんだと。何かを変えたらここにしか方法はないと私は思っています。以上です。どうもありがとうございました。

三谷仁美さんのお話

三谷…熊本大学法学部の三谷と申します。専門は民法不法行為法です。先ほどから場違いだなと思いつながら他のシンポジストのご報告を拝聴しておりました。私自身は、現在、福島原発事故に起因した損害賠償について関心をもち研究しているに過

ぎず、本日ご登壇頂いている方々と異なり、水俣病も、ハンセン病も、勿論、福島原発事故に関しても、直接的な関係性はなく、その意味において当事者性を欠いております。ただ、本日報告の機会を与えられましたので、少しお時間を頂戴して、お話をさせて頂こうと思います。

報告に際し、当シンポジウムの発案者である岡田先生から、被害者分断の現状及び分断を克服する方向性という二つの点について分かる範囲で答えるように宿題を頂きました。しかし、この分断というテーマは私にとつて非常に難しいものです。被害者の分断がなぜ生じているのか。そしてその分断が何をもちあわしているのか。さらに被害者に生じている分断はどのように克服されるべきか。まずはこの宿題に対する私の考えを述べた後、慰謝料の観点から、福島原発事故についてお話ししたいと思います。

分断をめぐる二つの宿題

まずは、宿題の分断について。敢えて申し上げれば、国が被害者に対する賠償（補償）を検討するために、一定の基準を提示すること自体、いわば分断を生むように思えます。例えば、水俣病の認定基準をめぐる諸問題についてみれば、国が提示した基準に合致した者が水俣病の「認定」患者であり、そうでない者は未認定患者となります（熊本学園大学水俣学研究センター主催の合宿に参加させて頂いた折、フィールドワークで

伺ったお話ですが、後者のなかには、二せ患者と呼ばれたという方もいらっしました）。また、「らい予防法」を根拠に行つたハンセン病元患者をめぐる隔離政策も患者を一般社会から強制的に分断させましたし、国賠訴訟を経て救済法が制定された後でも、ホテル宿泊拒否事件が象徴するように、元患者に対する新たな分断の構図を印象付けました（本学文学部の故小松裕先生がオーガナイザーを務めておられた「ハンセン病講座」で菊池恵楓園にお連れして頂いた際、当該事件にかかる展示資料を拝見し、とても衝撃を受けました）。

福島原発事故については、当面の被害を早期に把握するためのガイドラインとして原子力損害賠償紛争審査会（以下、原陪審）により中間指針が設けられましたが、あくまで目安に過ぎないにもかかわらず、裁判例を見る限りにおいては、この中間指針があたかも賠償基準のように流用されている事実があります。当該指針に基づいて国が一定の賠償基準を示し、この基準に合致する者は避難者であり、合致しない者は自主避難者となる。このようにして、国が決めた避難指示区域外の避難者に対し、あたかも自主的な選択として、勝手に避難をしているという認識が生まれ、その結果、被災者間においてさえ分断がもたらされました。水俣病もハンセン病もそして福島の場合も、当事者（患者・避難者）と非当事者との間の分断という単純な構図だけではなく、当事者間における分断も含め非常に複雑な構図が作出されたことは、このことから明らかです。ただ、福

島原発事故事案についてみれば、私は必ずしも、区域設定をすること自体を否定しているわけではありません。未曾有の災害を前に、暫定的な救済策が検討される際には、何らかの線引きが必要であることは間違いありません。私は、分断それ自体が問題ではなく、仮に、当事者に何らかの基準を設定し、本来一枚岩になって加害行為者に対峙するべき当事者間に衝突をもたらすことで、意図的に、被害者の分断を意欲する者がいるとすれば、その者こそが批判の対象とされるべきであると考えます。

私は、本来、被害者というのは、被害を受けたと感じる当事者の判断が最大限尊重されるべきであると考えます。しかし、国がそこに何らかの線引きをし、その基準を盲目的に受け入れさせるように促すことで当事者性を喪失させるような構図を作出し、結果、被害者間に分断を生じさせるようなシステムを構築してしまっていること、これが、分断に至る最大の原因ではないかと考えます。以上が一つ目の宿題に対する回答です。

そして、宿題の二つ目、分断を克服する方向性についてですが、私の聞き取り対象者がまさに分断の当事者であって、分断の克服というよりもむしろ分断により被った損害に関心をもっているため、ちょっと思いつかなかったのですが、現時点で、やっぱり共感力という言葉に集約されるのかなと思いました。自分自身もそうですけれども、当事者性が欠落している場合であっても、現場に足を運び、当事者の声に耳を傾けること、当

事者の置かれている状況に自分を重ねること、例えば川内原発が事故を起こした場合に熊本に住む私はどうなるのかなどと想像力を働かせること、そうすることで、当事者との心理的距離が縮まり、結果、当事者と自身を切り離すことなく、無意味な分断の争いに巻き込まれなくなるのではないかと、ちよつとずれている気もしますが、そのように考えます。

自主避難という選択

ここから、研究に関するお話を致します。福島原発事故における民事責任というのは原則として民法七〇九条の不法行為という規定に基づいて請求がなされます。不法行為の法的効果は損害賠償で、損害の算定方法については個別項目積み上げ方式と呼ばれており、財産損害や非財産損害等の損害費目をすべて積算するという形式を採用しています。私自身はこの損害の中でも一般に慰謝料と称される、精神的苦痛をどのように算定するのが良いかという点に興味があります。とりわけ人の心の痛みを金銭に換算するためにどのような根拠を用いているのかというところに強い関心をもっています。現在、その慰謝料の性質を考えるにあたり、福島原発事故事案を題材としています。

それでは、福島原発事故訴訟に関連して、福島原発事故にかかると避難指示区域の概要をご説明いたします。これは、福島県のホームページから引用した、最新の避難指示区域が示された図になります。避難者数は、三〇二一人で、とりわけ福島県

から県外への避難者は、三万人（新型コロナウイルスに起因して五月と六月は調査不実施のため最新データは四月九日時点）。そのうち、熊本県には七五名いらっしゃるそうです。内訳は、みなし仮設や公営住宅等に住んでおられる方が五二名、親族・知人宅に住んでおられる方が二三名です。避難指示区域は、報道等でお聞きになったことがありません。避難指示区域は、線量の高さに応じて、地震発災直後は五つに分類されていたのですが、現在は、安全確認を経て、区域が再編され、帰還困難区域、居住制限区域及び避難指示解除準備区域の三つになっています。私自身の調査対象地域は、飯館村、川俣町、二本松、葛尾村、そして川内村です。本年三月四日に双葉町の避難指示解除準備区域が解除され、一部帰還困難区域のなかにある避難指示解除準備区域を除いて、すべて解除されました。私が関心をもっている自主避難者とは、国が定めた避難指示区域外からの避難者であり、新聞報道によれば、ピーク時（二〇二二年六月）には、三四六九八七人いらっしゃったようですが、国は公表されているようなデータを作成していないため、正確な避難者数を把握できない状況です。

次に、放射線の線量測定についてですが、私が現地で撮影してきた写真をご覧ください。左側の写真は、空間線量を計測するために駅前や広場等に設置されていたものですが、高さ二メートル弱です。右側の写真は飯館村の公衆浴場を訪れた際に受付に設置してあったものです。こちらも一メートルくらいの

高さに置いてありました。ここで着目して頂きたいのは、日本は、空間線量を計測しているという点です。他方、福島と同じく、国際原子力事故評価尺度で最も深刻な事故に当たる「レベル7」に相当したチェルノブイリ原発事故は、土壌線量を計測しているようです。福島の事故とチェルノブイリの事故を、計測方法が空間か土壌かの相違だけをもって単純比較し優劣をつけることには関心がありませんが、このスライドをご覧ください。日本では、日本というところの避難指示区域の範囲がチェルノブイリのそれに比して狭く設定されていることがお分かりかと思いますが、私は、同規模の事故で計測方法がなぜ異なるのか、そして、放射線量に起因する両国の避難区域に対する捉え方の差を踏まえ、避難指示区域外避難者、すなわち「自主避難者」に分類される方々が、本当に自主的に或いは勝手に避難していると評価してよいものなのか疑問を抱いております。

過剰診断と小児甲状腺癌

自主的に避難を決めた方々のなかには、幼いお子さんを抱えるお母さんがいました。いわゆる母子避難です。子供の健康被害とりわけ甲状腺癌に対する懸念があったものと思われまふ。福島県立医科大学は、福島県の委託を受けて、県民健康調査を実施しています。本年二月、福島市で国際シンポジウムが開催され、「県民健康調査」とこれまでの調査結果にかかる報告があり聴講に参りました。そこでの報告によれば、少なくとも原

発事故に起因した甲状腺癌は福島県において優位とはいえないというものでした。ただ、原発事故前、小児の甲状腺癌は、学校の健康診断で指摘されたり、親御さんが首元のしこりを発見する等、すでに外的に顕在化された状態によって判明していたそうです。しかし、原発事故後、福島県が実施している検査は、一斉検査であり、手術をするようなレベルではないような癌も発見されるようになったそうです。つまり、過剰診断による甲状腺癌の発見という事象が、あたかも福島において小児の甲状腺癌が増加しているという印象を与えることになったという趣旨の発言がありました。ただ、従来の甲状腺癌にかかるガイドラインが、あくまで成人を対象にした内容であり、今回のように小児を対象としたようなガイドラインはいまだ存在せず、それゆえに福島原発事故案をもとに、小児の甲状腺癌にかかる調査結果が待たれるということでした。その意味において、原発事故に起因した小児甲状腺癌の増加については、現時点で結論が出せないということでした。

避難者と難民

このシンポジウムにおいて、私が最も衝撃を受けたことは、福島県の避難者、それから自主避難者の置かれている状況が、内戦あるいは難民の置かれている状況に類似しているという精神科医からの報告でした。私は、避難者の方々が、避難生活に起因して心を病むことの本当の意味を分かっています。

長期間、内戦状態や難民に匹敵するほどの過酷な状況に置かれ、心の健康を保つことができない環境で暮らすということは、自分の想像をはるかに超えた心理的状态であり、私には全く見えていなかった現実でした。

中間指針に基づく慰謝料

続いて、聴講対象が法学部学生であることから、福島原発事故訴訟についても言及しておきたいと思います。最初に述べましたように私の関心が慰謝料の性質にありますので、主として、その視点からご紹介できたらと思います。

原発事故による被害救済は、大きく分けて三つあります。中間指針による賠償金の支払い、裁判外紛争処理である原発AD Rそして裁判です。

まず、中間指針に基づいて支払われた慰謝料をご紹介します。帰還困難区域は一人一四五〇万円です。当該区域は、事故から五年後の線量を参考にするため、二〇一六年七月でいったん区切って、その間七五か月分に毎月一〇万円を乗じたものに、帰還が困難となり移住を余儀なくされた慰謝料（精神的苦痛）として七〇〇万円を加えた額になります。居住制限区域及び避難指示解除準備区域は二〇一一年三月から二〇一八年三月までの八五か月分で、一人八五〇万円です。現在の区分けと区別するために、ご覧頂いているスライドでは、「旧」をつけたのですが、二〇一一年九月に解除された緊急時避難準備区域は一人

一八〇万円、それから二〇一一年四月二二日に解除された屋内退避は一人七〇万円となっております。その他、原賠審は、「自主的避難対象区域」というのを定めておりまして、避難指示区域外のうち、自主的避難対象区域内と設定された地域のことを指し、例えば、福島市、いわき市、そして白河市が含まれます（福島県の北にある宮城県の間、村が一部包含されるが対象地域はほぼ福島県に限定）。この自主的避難対象区域にも、二〇一一年一二月までの期間を対象に、中間指針追補に基づき若干の慰謝料（一人八〇四万円）が支払われております。一方、私が関心を持っているいわゆる自主避難者は、当然に、中間指針に基づく東電からの賠償金は得られないということになります。

賠償金もたらした弊害と恩恵

冒頭で少し述べましたが、分断に関して、私が実地調査によって知り得た賠償金をめぐる諸問題について報告書に記載した項目をスライドに列挙しました。具体的には、人的関係の破壊、賠償金の恩恵、単身世帯の状況、先祖への感謝、文化の復興そして賠償金の負の側面です。

地域、家族そして自己の崩壊

福島原発事案に関心をもっておられる方であれば、おそらく人的関係の破壊という点については、容易に想像して頂けるのではないかと思います。例えば、国による区域の設定は、事故

当時の住民票を参考にしましたが、居住地（住民票）は避難指示区域外にあるけれども、職場が指示区域内にあった場合には、慰謝料支払いの対象から外れ、同じ職場に勤務しながら、賠償金が支払われている人（世帯）と、そうでない人（世帯）が生じます。或いは川一本隔てて、指示区域内・外の区別があった場合、ほとんど地理的差がないにも関わらず、当該区域設定により、一方には賠償金が定期的に振り込まれ、他方はそれが全くないという状況が生じます。区域を設定したのは、住民ではなく、国であることは誰もが知っていることですが、それでも金銭面で明らかな差が生じたとなれば、賠償金の支払いがない住民のなかには、その不満を受領者である隣近所の住民にぶつけるという方もおられたそうです。また、家族関係の破壊についても話を伺いました。例えば、先ほど言及した一〇万円の慰謝料については、当然家族全員が毎月一人一〇万円を受領するわけですけれども、幼い子どもは、慰謝料一〇万円の価値をなかなか理解することは難しいように思います。しかし、避難生活或いは中間指針に基づく賠償金支払いの長期化により、事故当時幼稚園児だった子供も、支払い期間が終了した七年後には、小学校高学年若しくは中学生になっており、年齢を重ねるにつれ、両親が自分名義の慰謝料を管理していることを知るようになります。そうになると、子供が親に対して、「自分の金だから返せ」というようになったり、親の判断で多額の現金を子供に渡さないとした場合に子供が親の使い込みを疑うなどとい

う事態が起こったこともあったそうです。さらに、私が聞き取りをさせて頂く地域というのは、元来、二世帯・三世帯同居が当たり前のようなご家庭がほとんどでした。ですから、賠償金を得ることがなければ、およそ別居という選択肢はなかったにもかかわらず、原発事故に起因して、一定額の金銭を受領する機会が与えられ、結果、現役世代（若夫婦）と年寄り世代（親）が別居するに至ったということを複数伺いました。当然そこには、賠償金の問題のみならず、放射線量に対する感覚の違いも影響していると考えます。小さいお子さんがいるご家庭はやはり放射線に対する恐怖等から避難を選択することになるでしょうし、年寄り世代の場合は、放射線が目に見えないためその恐怖心も徐々に薄れ、住み慣れた家に戻りたいという、両者に根本的な違いが生じてしまい、それまで同居していた一家がバラになるということもあり得ます。

またある方は、たまたま事故当時、居住制限区域や避難指示区域に住民票があつたというだけで、自己資金であればおよそ受けられなかったであろう高度医療を無償で受けることができ、現在も元気に生活できていることを挙げ、これはやはり賠償金というか、避難指示区域内に住民票があつたことの恩恵だとお話されました。

また単身世帯は非常に過酷な状況に置かれやすいということも伺いました。例えば複数世帯が同居する大家族ですと、少なくとも感謝料一〇万円に絞ってみても、ひと月に六〇万円、

七〇万円という額が一世帯に振り込まれますが、単身世帯の場合、ひと月に一〇万円のみなんです。そうなると帰還後の自立再建が難しく、前向きに人生を歩もうとか、自分を奮起して頑張っているという気持ちにはなれず、気落ちする時間が増え、精神を病んでいくという悪循環が生じるという事実があるそうです。ゆえに、「賠償金は十分だということをいう人がいるけれど、単身世帯と複数世帯の違いがわかっていない」というご意見もありました。

土地を汚されることⅡ先祖を汚されること

損害の算定場面においては、先祖への感謝も重要な要素となつていくことを知りました。財産的損害の算定対象となつた、自宅、土地そして田畑の多くは、先祖代々受け継がれてきたものでした。私が聞き取りの対象としている地域は、農業が盛んなところであり、昔から、非常に雪深い場所でもあつたそうです。そういう雪害にもめげず先祖が必死に耕し、子孫に財産（土地、田畑等）を遺してくれていたからこそ、そこに賠償金が払われるようになった。事故によって生活は奪われたけれども、賠償金が入るのは先祖のおかげであって、自分たちも、先祖が守り継いだ家や土地というものを守っていくべきだとおっしゃっていました。とりわけ、農家にとっては、原子力発電所の事故により大量の放射性物質が自身の土地に降ってきて汚されたわけですが、農家従事者は、これをとらえて、先祖

を汚されるのに等しいとお話くださいました。土地を汚されるということよりもこれによって先祖を汚されたという感覚をおもちになっていることを知り、ここで侵害された法益は、どのように回復できるものであろうか。なかなか答えは見つかりません。

復興の妨げ

「原発事故によって、人生を根底から覆されるような経験を強いられたのに、その精神的苦痛をひと月たった一〇万円で算定されるというのは耐えられない、到底納得する額ではない」。私が、ある時まで現地で聞き取りをしていた際、最も多く伺ったご意見です。それゆえ、国や東京電力の過失を裁判の場で問い、正当な損害の評価を求めて、訴訟参加を決めた方も多数おられました。実際、原発事故にかかる民事裁判は、全国各地の裁判所に提起されています。私も、そのようなご意見に共感することが多かったのも事実です。

しかし、飯館村の文化祭に参加し、損害賠償に対する捉え方を考えさせられるような経験をしました。この文化祭は、原発事故後、初めて村で開催されるため、全国に避難している村民が一堂に会することもあり、お話を聞く好機と思い参加しました。文化祭で接した村民の多くは、やはり、賠償額に満足してはいらっしゃいませんでした。しかし、ある村民の方が「そもそも賠償金はないほうが立ち直りが早い」とおっしゃったんで

す。もちろん自分に入ってくる賠償金に満足しているという意味ではなく、自分が被った被害が正当に算定されないのであれば、そもそもないほうが良かったという趣旨でした。驚いたことに、このようなご意見の方がおひとりではなかったんですね。もちろん、たまたま同じ意見の方々がグループを作っていただけなのかもしれませんが、この発言には驚きました。

救済には事前救済と事後救済とがあって、大雑把に分けますと、行政法による規制などは事前救済になるのですが、民法の、少なくとも不法行為は発生した損害を金銭に換算するわけで事後救済になります。それゆえ避難者が被った損害というものがどのような類のものであるのか（支払われた賠償金に対してどのような想いがあるか。事故以来、どのような辛さを抱えているか）について聞いて回っていたため、必然的に避難者の意識を過去に向かわせてしまうことになります。

「賠償金（額）」には、満足はしてないけれども、文句を言い続けても何の解決にもならないから、必死に前を向こうと自分を奮い立たせて一日一日を生きているのに、貴方の質問は、自分に後ろを向かせるものであり、非常に不愉快である」、そして、「あなたのような人たちが復興を遅らせるのだ」というお叱りも受けました。今思えば、私自身が非常に甘い考えであったに過ぎませんが、その当時は、思いもよらないお話で、心に突き刺さった言葉ではありました。

自主避難者の慰謝料

今日は簡単なものですが、福島原発事故にかかる訴訟の一覧表を作成してみました。福島事案については、沢山の判決が出ていますけれども、ここに挙げている裁判例は、集団訴訟であり、かつ現時点で、判例集等に登載されている八事例に絞りました。集団訴訟のなかでも最大規模の生業訴訟は、新聞等で大きく取り上げられたこともあり、皆さんのなかにご存じの方がいらっしやるかもしれませんね。

ここで取り上げた裁判例において原告の多くは、避難指示区域内の方々で、かつ損害賠償金をより正当に評価してもらいたい若しくは国及び東電の過失を認めさせたいという想いで訴訟提起されておられます。なかには東京や群馬から地方都市へ引っ越したとかいうように、いわゆる中間指針が定める避難指示区域にも自主的避難対象区域にも該当しない避難者も原告として訴訟参加されておられます。この方々にも、時期的には二〇一一年一二月、確か冷却装置が整った時期を限度に一万円の慰謝料が認められた事案もあるんです。これは、国が指定した避難区域外であり、いわゆる中間指針の想定していない県から避難された方々に対する慰謝料の認容であり、国が設定した放射線量に鑑みても、慰謝料が認められるはずはないのですが、認められました。私はこの点に強く興味をもちました。裁判所はその判断において、どのような想いを込めたのだらうか或いは裁判所が考える避難者の被侵害利益は何だろう、と。

不法行為の位置づけと題するスライドをご覧ください。一言で「救済」といっても色々な方法があると思うのですが、民事裁判において救済を求めるとしても、その救済範囲は、不法行為訴訟における救済（すなわち損害賠償）であり、救済の全体像からすれば一部でしかありません。それではなぜ訴訟提起するのかと原告の方に伺ったところ、先程も述べましたが、損害賠償ではなく、国や東電の過失を公に認めてもらいたいとの想いからだとお話くださいました。

裁判の場において避難者の範囲が中間指針とは異なる基準で認容されたことは、当該指針の性質に鑑みても妥当であり、当然のことと考えますが、他方で、裁判所の判断が避難対象者の範囲にどのように影響するのかは注視すべきことであると考えます。水俣病の場合、最高裁判決を経て、認定基準が改定されるということが繰り返されてきました。そのことで、患者が翻弄され続けているのは周知の事実です。福島的事案においても同じことが繰り返されてはならないと考えます。

避難者という地位

「共感と地位の確保」と題したスライドをご覧ください。これが最後のスライドになります。私が現地で聞き取りをするなかで一番寂しいなと感じるのは、当事者の方々が、事故の風化についておっしゃることです。確かに、事故から長時間が経過しているため、当事者でない方々は、忘れていきますよね。し

かし、避難者が今なお、非常に過酷な環境に置かれていること、避難者のなかには出自を隠したまま避難先で新たな生活を送っている方がおられること。想像するだけでも非常に辛い状況だと思っています。

福島事故は決して忘れ去られてよいものではなく、避難者の存在が希薄になっていくことで、風化が加速するような気がします。「救済」という観点からみれば、不法行為訴訟における判決は、その一部でしかないのですが、例えば、スライドでお示しした、立法、報道、原因企業、各種学会、専門家、世論、国際機関等、様々な観点から、これらが各々避難者と対峙するという縦の関係ではなく、避難者を中心に円陣を組み、まずは避難者を支えるという視点が重要であると感じています。勿論将来的には避難者も同じ輪のなかに入り、経験値を共有すること、共に事故の教訓を考えていくことが必要ですが、ひとまず、事故の風化が進む現在においては、少なくとも民事裁判における判決内容を受け、避難者という地位を確保しておくために、全国に避難している避難者が避難先の自治体等で十分な対応を受けられるような仕組みを維持し、その方向性を打ち出すということが今求められているのではないかと思います。

私からは以上です。ありがとうございます。

付記

本稿は、二〇二〇年六月六日土曜日一四時から一七時に、熊

本大学法学部のA1教室にて開催された、「被害者分断の克服に向けて」と題するシンポジウムの内容をまとめたものである。

当日は、シンポジストの方々と熊本大学法学部の教員のみ教室にいて、遠隔講義の手法で、参加者にシンポジウムの内容を配信する形で行われた。参加者は岡田が確認した段階では八六人で、遠くは関東甲信越地方からも参加者があった。

本シンポジウムがテーマとした「被害者の分断」は、それによって被害者どうしが相争い、結果的に、被害者に損害賠償の責任を負うべき国家や企業の責任が事実上軽減ないし免じられてしまうという現状に、熊本大学法学部、そして、熊本大学大学院人文社会科学研究所（法学系）がどのように取り組むべきかという問題意識から企画されたものである。本来ならば、シンポジストの皆さんの間、さらには遠隔参加の皆さんとシンポジストの間で質疑応答の時間を作りたいところであるが、司会を務めていた岡田の不手際も相まって実現できなかった。当日できなかった質疑応答が、今後展開されることを期待する他なく、心よりお詫び申し上げる次第である。

他方で、本シンポジウムの内容が記録されることを通して、「らい予防法」違憲国賠訴訟を提起された当事者の方々が、どのようにして国による様々な分断工作と闘われたのかという事実が共有され、それが、チッソ水俣病の被害者や福島第一原発事故の被害者の方々が直面している分断の克服に少しでも寄与するのであれば、企画者としてこれに勝る喜びはない。

もちろん、被害者の分断は、チッソ水俣病、ハンセン病、そして、福島第一原発事故の被害者にのみ生じているものではない。新型コロナウイルスを契機としてその直接・間接の被害者となった方々の間にも、この分断は既に生じているように見受けられる。また、犯罪被害者、冤罪被害者、さらには、労働現場での被害者など、様々な被害現場で分断は生み出されてきた。熊本大学大学院人文社会科学研究所（法学系）で研究に携わる者としては、こうした被害者分断を克服し、被害者分断をそもそも生じさせないようにする理論的・実践的課題に今後もしっかり組まなければならないと考えている。

なお、本シンポジウムの反訳については、熊本大学法学部三年生の中路智之さん、橋本佳奈さん、満田亜美さんにお世話になった。記して謝意を表したい。

最後になるが、四人のシンポジストの皆さんに、改めて心から感謝申し上げる次第である。

岡田行雄

チッソ水俣病事件

— 真実の分断との闘い —

～ 父川本輝夫と家族の物語 ～

2020. 6. 6 熊本大学 シンポジウム



水俣病過激派患者・家族

自主交渉派患者・家族

水俣病資料館 語り部

有限会社 リハシップ あい

代表取締役社長

川本愛一郎



水俣病患者救済に一生を捧げた67年の生涯
父川本輝夫(1931、S6. 8月～1999、H11. 2月)

本日の講話

1. 父川本輝夫と家族の闘い
2. 父と私たちが経験した“分断”とは？
3. “分断”を克服する道とは何か？
4. 父の素顔

CHAPTER 1

父と家族の闘い

若き日の父 輝夫 母 ミヤ子



1957年(S32. 2月)結婚

川東源次郎と平子との結婚記念写真。花婿源次郎、花嫁平子。1957年2月20日、水原市伊
の宮撮影。



1958年3月生まれ生後3ヶ月の私を抱く母。海は豊かで恵みだった
坪谷海岸(水俣湾:背景恋路島) 1958年(S33)7月撮影





家族の肖像



本当は、あと二人
兄妹がいた(流産)

川東第一高校の入学式に入場した際に、祖父の足が怪我で倒れ、1960年と見られ、本誌
掲載された写真



2歳の私をお守りする祖父 1960年(S35)撮影。
背景は、旧母屋。一本釣り漁師の祖父は、この後水俣病
症状が悪化して狂騒状態、寝たきりになり、1965年(S
40)死亡。未認定。足首に輪ゴム、紫色。



熱意とは、ことある毎に意志を表明することに他ならない。

潜在患者発掘:祖父の死と被害者の苦しみ
1969年(S44)～1970年(S45)
(私、小学6年生～中学1年生)

毎日毎晩自転車で勤務後の夜間と休日に
水俣病多発地区の家々(水俣市内～芦北～
鹿児島県出水市～阿久根市など)を訪ねま
わった。

エピソード:父ちゃん、今日は行かんでよか
と?

たった一人からの闘い

人間としての尊厳の回復を求めて チッソ水俣工場正門前・東京本社前 座り込み

1971年(S46)11/1～1973年(S48)7/12(1年9ヶ月)



チッソ水俣工場前、自主交渉の座り込み開始。看板は著者が書いた(1971年11月 撮影・塩田武史)



父の闘い : 満身創痍



国境を越え、海外に逃れた「脱北者」の多くは、海外で生活する中で、様々な困難に直面している。海外で生活する中で、様々な困難に直面している。



川本輝夫が、海外に逃れた「脱北者」の多くは、海外で生活する中で、様々な困難に直面している。

人は幸せになるために生まれてきたはずだ。勇気と信念を教えたくれた父 川本輝夫



家族で上京 父を励ます:1971年(S46)12/30



母:ミヤ子

私:中学2年生
妹:小学5年生

チツノ本社前座り込みデモ前

熱心のデモ隊で集まる。同業生や多摩市議会議員らも参加した。1971年12月30日、東京・丸の内駅チツノ本社前で

母:「父ちゃんは偉か。人のために闘っている」

私と妹 ⇒ 父へ激励の手紙
〔家族のエピソード〕

- ・夜中の電話
- ・誹謗中傷
- ・熊本県 川本輝夫で届く葉書
- ・父の逮捕・家宅搜索
- ・消火器
- ・火事寸前
- ・懐中電灯を抱いて寝ていた

環境庁座り込み 1978年(S53)



S53年2月24日 国の水俣病責任を問う環境庁・熊本県庁同時座り込み。
3月19日 強制排除:長官石原慎太郎

環境庁に集り込んだ市民代表者たち。強制排除を主張する環境庁職員が来た。1978年3月。東京・国会議事堂前で撮影された。1978年3月19日(毎日新聞)



環境庁の強制排除に抗議する市民代表者。国は水俣病責任を問う。1978年3月。東京・国会議事堂前で撮影された。1978年3月19日(毎日新聞)

CHAPTER 2

父と私たちが経験した“分断”

分断1:祖父水俣病未認定の理由

祖父:1961年(s36)10月 水俣病発症

感覚障害・運動失調・企図振戦・歩行障害・難聴・構音障害等(視野狭窄は未診察)
未認定の理由:水俣病の発生期間から外れている。

水俣病 ⇒1953年(s28年)~1960年(s35)終息:当時の医師の通説、根拠なし

※1960年終息説の背景 ⇒1959年12/24 サイクレーター(単なる浄化槽)完工式



来賓の熊本県知事の前で、新日窒社長吉岡喜一は処理水を飲んで見せた。(実際はあらかじめ“水道水”とすりかえ)
「蛇足ではございますが、一般の化学工場においては、本設備の如き高級大規模な浄化設備の設置は本工場が最初でございます」

分断2: 父逮捕歴4回・自宅家宅搜索2回

①1972. S47年10月31日 警視庁丸の内署、テツソ社員に対する暴行容疑で父を強制連行・逮捕取り調べ自宅家宅搜索。

②1976. S51年10月3日 三里塚で逮捕される。13日拘留の末、不起訴。⇒不作為違法確認訴訟判決(1976. S51年12月15日 勝訴判決)

③1978. S53年3月27日 国の責任追及座り込み環境庁・熊本県庁の同時座り込みの県庁強制排除抗議中に熊本北署に、逮捕される。3日間拘留。不起訴。⇒3月20日 歴代の通産・厚生・農林・熊本県知事を殺人・傷害罪で訴告。

④1980. S55年4月19日 水俣市で逮捕される。12日拘留 不起訴。⇒日本初の公訴権濫用を戒める川本裁判「公訴棄却判決」で無罪確定、全面勝訴。(1980. S55年12月17日)

※拘留中のエピソード。「あの川本さん?」、家族「あれっ、また逮捕された」

分断3: 2つの漁民騒動: 東京湾江戸川沖と不知火海

1958(S33. 6月)東京湾江戸川沖



(東京)本州製紙江戸川工場に浦安漁民(800人)操業停止要求

- ⇒ 警官隊と衝突、漁民、警官隊の双方に負傷者多数、漁民逮捕8人
- ⇒ 国・都は、工場操業の一時停止と水質2法(水質保全法・工場排水規制法)の制定。行政指導発揮。

1959(S34. 11月)不知火海



(水俣)テツソ水俣工場に不知火海漁民2,000人操業停止要求、祖父も水俣漁協から参加。

- ⇒ 警官隊と衝突、漁民、警官隊、工場側に負傷者多数、漁民逮捕53人
- ⇒ 国・県は、食品衛生法の不適用とテツソ排水の垂れ流し放置(水質2法不適用)。
- 逮捕者53人の内3人がのちに生活苦と汚名で自殺。

分断4: 見舞金契約(命の値段30万円)

1. 見舞金契約(1959年S34年12月30日)

「死者30万円、葬祭料2万円、生存患者年金成人10万、未成年者3万円、成人に達したとき5万円。」

※「今後原因が工場排水と判明しても追加補償しない」
(第5条)を含む。

→後の水俣病裁判判決で「公序良俗に反する」
(つまり破廉恥だと指摘され無効となる)

分断5: 水俣病の主な改名運動

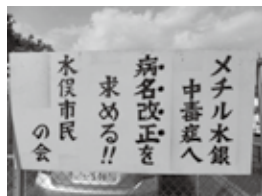
1958年12/19 水俣市議会 市議松本雄象氏(水俣市漁協理事)質疑
「魚関係をやっているのに、(水俣)とつくと他県へ出荷した時、トラックを
隠される。改名をお願いしたい。」

1959年10月 熊日新聞「合理性を欠いた病名、水俣病に寄せて!!」という記事

1972年2/27 環境庁長官大石武一氏、水俣視察
「水俣を明るくする市民連絡協議会」がプラカード
⇒「水俣病という名前を変えてください」

2019年3月 水俣市チッソ水俣工場国道3号線沿いに
看板設置、水俣市民の会

※「チッソ水俣病」または
「チッソメチル水銀中毒」はいかがでしょうか。



年月	行政・大学・専門機関など	被害者	主な背景
1956年 (S31年)	5/28 水俣市奇病対策委員会 (保健所、水俣市、市医師会、市立病院、 新日窒 附属病院で構成、のち水俣市奇 病研究委員会に改組) 8/24 熊本医学部水俣奇病医学研究 班を組織(略: 熊大研究班)	・ネコ狂死相次ぐ ・漁民生活困窮 ・奇病、月浦病、猫踊り病、ヨイヨ イ病など、発病家庭に差別 ・50人発病、11人死亡	4/21 新日窒附属病院女児受診 5/1 細川院長⇒水俣保健所報 告・公式確認 脳症状を呈する原因 不明の疾患 7/27 日本脳炎疑いで隔離 8/14 水俣市奇病研究委員会⇒ 熊大医学部へ究明依頼 11/3 熊大研究班⇒伝染病では なく魚介類摂取による食中毒
1957年 (S32年)	6/24 第3回熊大研究班報告会 第2病理教授 武内忠雄氏「水俣 病」の仮呼称を提案:伊藤道雄氏	8/1 水俣奇病罹災者互助会 発足 会長 渡辺栄蔵氏 ※1	11/30 熊日新聞(夕)「水俣病の 原因究明、東京で研究報告会」 (マスコミで初の水俣病呼称か?)
1958年 (S33年)	7/7 厚生省厚生局長 山口正義氏「水 俣病」の呼称(公式文書で初) 以後、「水俣病」呼称一般化	8/1 水俣病患者家庭互助会へ 改称※1	
1959年 (S34年)	7/14 水俣病専門病棟落成 水俣病患者収容29人(水俣市立病院内) 11/12 厚生省食品衛生調査会水俣食中毒特別部会、「水俣病は水俣湾 及びその周辺に棲息する魚介類を多量に摂取することによっておこる、主 として中枢神経系統の障害される中毒性疾患であり、その主因をなすもの はある種の有機水銀化合物である」と厚生大臣に答申、翌日同部会解散 10/7 細川ネコ実験400号(テック技術部・社長へ報告) 12/30 見舞金契約(水俣病患者家庭互助会)		7/22 熊大研究班、「水俣病は現 地の魚介類を摂取することによっ て引き起こされる神経系疾患であ り、魚介類を汚染している毒物とし ては、水銀が極めて注目されるに 至った」と公式発表(中間報告)

水俣病という病名について

水俣病の名称の初出

1957年(S32)6/24 第2回熊本医学部水俣奇病研究班報告会

提案者: 武内忠雄氏(第2病理)

「奇病というのは、あまりに非医学的であることから一応地名で呼んでおいたらどうであ
ろうか。かつて満州で不明疾患が克山地区に多発した際、克山病と名づけて便宜を図って
いたことがあるからである。

中毒性因子が確認されるまでは、水俣病を仮称としたい。なお、その後原因が明らかにな
れば、その原因に応じた名称にすべきである」

1979年(S54)1/20 武内忠雄「水俣病病理学的追及の歩み」 水俣病:有馬澄雄編集、青林舎

「その後も水俣病が使われつづけているのは、公的確認が遅くなったことで定着したこと
や本症が単純な有機水銀中毒と異なる魚介類を介して惹起された特殊な発生メカニ
ズム、また環境汚染に起因したいわゆる公害病であるという特殊な考えかたにも影響され
ていると考えられる」

分断6:水俣病特措法での文言

2010年(H22)4/16 鳩山内閣閣議決定、第2の政治決着

「水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法」

※背景:国の基準では水俣病と認定されない被害者らを対象とした国による新たな救済策

2010年(H22)5/1 ~ 2012年(H24)7/31:申請受付期間

⇒ 約68,000名申請

⇒ 約42,000名該当(一時金210万円、年金、医療費等)

※私、2012年5月に申請 ⇒ 棄却

⇒ 「再検討」のお願い(再申請との違い)

⇒ 2013年(H25)11/27 「水俣病被害者手帳」交付

CHAPTER 3

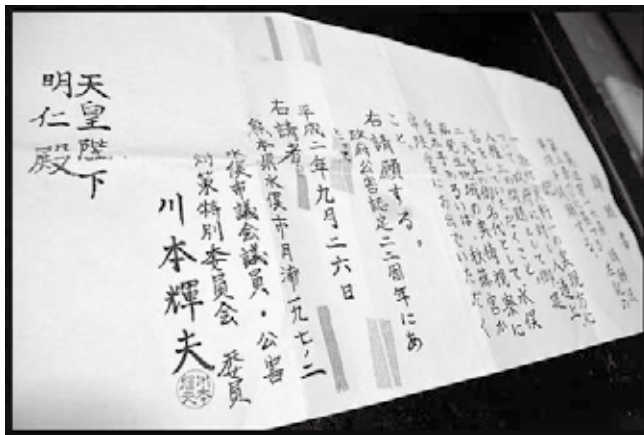
“分断”を克服する道とは？

“分断”を克服する道とは？

1. 当事者としての“勇氣”をだす ⇒ “声”を上げる
2. 事実を“知る” ⇒ 誹謗中傷・隠ぺい・改ざん・欺瞞・怠慢をしりぞける“強さ”を持つ
3. 現場に“学ぶ” ⇒ 真の“救済・解決”のために
4. 支援の“情と力” ⇒ “激励”の手紙やカンパで救われた
5. 真実を“伝える” ⇒ あらゆる“伝手”を使う

(例)小六法:請願法

※分断:一つにつながっているものを分かれ分かれに切り離すこと(デジタル大辞泉)



CHAPTER 4

父の素顔



ユージン・スミスと水俣と父川本輝夫

1. 水俣に3年間移住し水俣病患者を撮影。
2. 住居は、川本家から徒歩1分(50m)先。
3. 1971年(546)1月7日、父とユージン夫妻(妻アイリーン)、報道記者らは、チッソ五井工場(千葉県)の労働組合を訪れ、父たちの座り込みに理解と支援を求めた際、ユージン夫妻と父たちは、チッソ従業員約200名に囲まれ、五井工場の事務所内で暴行を受け負傷した。ユージンは、全身打撲、脊椎骨折、左眼失明、口蓋裂傷、カメラも破壊された。妻アイリーンも負傷した。
父も、右足指骨折、全身打撲を負った。
ユージンは、負傷した傷が悪化し暴行を受けた数日後に一時入院した。その後体調がすぐれず、1978年に59歳で死亡した。
※父たちに暴行したチッソ従業員は、チッソ水俣工場からも動員されていた。
チッソは、負傷したユージンに対し「自分で転んでケガをした」と嘘をついた。

川本輝夫 水俣病事件資料館(自宅)



父 川本輝夫の素顔



子どもが大好きな父でした。

絵でたどる 父(じいちゃん)の思い出 I



絵でたどる 父(じいちゃん)の思い出Ⅱ



ご清聴ありがとうございました。